

〈教育実践研究〉

国語科実技 帯单元によるルーティン型プレゼン演習

1人1分, 毎回5人, 約2年間で, 話す聞く力を育てる。

齋藤 隆彦

Regular Practical Activity of Giving Presentations in Japanese Class

One Minute for Each Student, Five Students a day, For Two Years

SAITO Takahiko

キーワード: 発信・受信・共有, 国語科実技, 試行錯誤, ルーティン, 帯单元

Keywords: Sending-receiving-sharing, Japanese practical activity, Trial and error, Routine, Regular module study

*本稿は本編と資料編で構成されている。本編中に「(資料〇〇)」と資料番号を記した。資料編は、大きく四つの群で構成した。一つは特定生徒の変化を追うもの。もう一つは、それぞれのテーマをそれぞれの生徒がどんな話題で展開したか、そのひろがりを見るもの。もう一つは、「再現」の活動での作品。そして、最後に、「プレゼン」に対しての感想などを生徒が書いたものである。

1 「プレゼン演習」概略

1-1 「プレゼン演習」とは

大まかに、次のような実践である。

- * 「帯单元」で毎時間。授業(平常50分あるいは短縮45分)の中の10分から20分を使っての演習。
- * 1人1分間をめやすに、教卓のポジションで、クラスみんなに向けて、話す(伝える)。
- * 毎回、5人が順番に話す。(「ルーティン化」)
- * クラス全員がやる(必ず自分の出番がある)。
- * 順番は毎週(1周とはクラス一巡)ごとにくじで決める。
- * 実施期間は平成21年5月～平成23年2月まで。学年でいうと、2学年から3学年まで。
- * 実施回数は、2年で8周。3年で9周。
- * テーマや話し手の原稿、聴き手のメモの仕方などは折々に変化させた。
- * プレゼンを1周聞き終えた後、聞き手による「再現」も3年の6, 7, 8, 9周でおこなった。

1-2 「プレゼン」と呼ぶのは

「プレゼン」を多くの人々は「コンピュータを使った、パワーポイント的な活動」と限定して思い描くらしい。私がここで「スピーチ」といわず「プレゼン」と呼ぶのは、「話せばよい」というのでなく、「自分の考えの提示」や「何かの説明」あるいは「劇の上演」としての活動を意識してのことだ。「相手に届く、相手を説得する、相手に感動を届ける」といった「遂行的」な意識をもたせたいと考えたからである。

1-3 「国語科実技」を意識する

「プレゼン」の力をつけるために「実技」を意識した。だから「プレゼン」に「演習」をつけ、「プレゼン演習」とした。

「跳び箱練習」と同じような時間にしたい。「跳び箱の理論」の伝達や「美しく跳ぶ映像」の鑑賞ではなく、「さ、跳んでみよう」「さっきの失敗を元にもう一度跳んでみよう」という「実技」の「演習」の時間としたい。

2 「聞く話す」の力を授業でつくる上での課題

2-1 「noisy」な小学生、「重苦しい沈黙」の中高生

佐藤学（2000）は小学校の教室空間の「noisy」さを指摘する。

諸外国の教育学者や教師を連れて小学校を訪問し、教室の参観を案内する機会が多いが、日本の小学校の教室に対する彼らの第一印象をたずねると、「noisy（騒々しい）」という言葉が返ってくる。確かにそうである。わが国の幼稚園と小学校の教室は、欧米諸国の教室と比べると、子どもたちも教師も喉に力が入った硬質の大きな声で話しており、騒々しい空間であることが特徴的である。

そして、その原因を「『明るく元気』な子ども（学校、教室：佐藤注）がよいという観念を教師も子どもももっているからではないだろうか」とし、「どこか無理がある『明るさ』や『活発さ』であり、ストレスの強い教室」と述べる。その「証拠」として、「中学校や高校の教室では、逆に、ほとんどの生徒が貝のように口を閉ざした沈黙の重苦しさが漂っており、騒々しい幼稚園や小学校との落差に、諸外国の教育学者や教師は驚くのである。」と中学校や高校の沈黙の重苦しさを挙げる。

筆者の目の前にいる中学生を思い浮かべるとき、「noisy」なクラスもあり、確かに「重苦しい沈黙」のクラスもある。「小学校」と「中学・高校」と明確な分離があるようには思わない。しかし、経験的に、中学1年は「noisy」になりやすく、2年3年としだいに「沈黙」化しやすい傾向があるように感じ取っている。また、これも経験的で、数量的な客観性はないが、私が参加してきた研究発表会の多くは「聞く話す」の公開授業を中学1年で行っている。まれに中学2年もあるが、中学3年での「聞く話す」の公開授業を見た記憶がない。多くの教師が「noisy」から「沈黙」へと変化することを認め、「沈黙」よりは「noisy」を選んでいるのかもしれない。

さらに、次のように、佐藤はその「沈黙」を生み出すものを次のように推し量る。

小学校の教師たちは、中学校になると沈黙してしまうのは中学教師のせいだと考えているが、むしろ小学校の教室の「明るく元気」な騒々しさが、中学生の重苦しい沈黙を導いていることも認識すべきだろう。偽りの自分を演じさせられた体験の蓄積が、中学校になった段階で、自分らしき人との関わり方や授業への参加の仕方を作り出すことを困難にしているのではないだろうか。

佐藤が中学の特徴とする「沈黙」、それが「偽りの自分を演じさせられた体験の蓄積」のために生み出されたものとするなら、その「沈黙」から言葉のやりとりを作り上げていくには、「本当の自分」を少しは出しても大丈夫な空間に教室を変えていく、あるいは、「本当の自分」をお互いが出し合うことで作り上げるのが教室空間である、と「教室観」「学校観」を変えていく必要がある。「自分

らしい人との関わり方や授業への参加の仕方」を一つ一つ学び取り、作り直す必要があるということである。それは、どこか、誰かが整備し、その上に国語科が、あるいはその中の「プレゼン演習」が乗っかるというものではない。他のすべての教育活動とともに、国語科や「プレゼン演習」もまた、その「自分らしい人との関わり方や授業への参加」を学ぶ機会であり、作り直しの機会であるにとらえるべきであろう。

2-2 話し言葉のいっそうの重視

浜本純逸(2008)は次のように「話し言葉教育のいっそうの重視」を述べる。

生活科が始まってから、「子どもはよくしゃべる」といわれるようになった。この後、「だから困る」という言葉が続くのであるが、そのように否定的に捉えないで、「このしゃべる力を国語科教育においていっそう強めて自己表現の言葉や広場の言葉へと転生させよう」と考えることが必要なのではなからうか。子どもの「おしゃべり」に今の子どもの関心や友人観や夢が、要するに自己が現れている。そのおしゃべりを一分間スピーチや三分間スピーチに切り替えて、子どもが見てきたことや考えていることをみんなに伝える表現の場にしていくことなどを試みたい。おしゃべりの話題から次の単元の主題を引き出していくこともできよう。子どもたちが自己を表現し、言葉で他者と関係を持って心豊かに生きていけるように、つとめて力を添えていきたい。

浜本の「このしゃべる力を国語科教育においていっそう強めて自己表現の言葉や広場の言葉へと転生させよう」という提案を「自分らしい人との関わり方や授業への参加」を学ぶ機会を作る指針としたい。「自己表現の言葉」は「自分の経験や思いを自分にぴったりの言葉を探して述べようとする意志」に支えられた言葉であり、「広場の言葉」は、その「自分の経験や思いを気心の知れあった相手だけでなく、そこに集うみんなに届く言葉で述べようとする意志」に支えられた言葉であると筆者は理解する。

また、「重苦しい沈黙」のクラスにおいても、浜本の提案は生きるだろう。なぜなら、その多くの生徒たちは佐藤の言に依れば「よくしゃべる」児童あるいは生徒だったのだから(それが、「noise」であったにしても)。「おしゃべり」ができないから「沈黙」しているのではない。「おしゃべり」に疲れ、あるいは、「おしゃべり」以外に声を発する作法を知らないから、「沈黙」していると考えてよいだろう。筆者の経験では、「いじめ・からかい」傾向が強いクラスでは一部の生徒が極端に騒がしいか、あるいは、「重苦しい沈黙」に陥りがちのようである。強い者、強い者におもねる者だけが騒ぐか、お互いに警戒し合い「沈黙」を作るのである。

「noisy」な教室に発生するのは文字通り「noise(騒音)」である。「だから困る」と言われる「おしゃべり」は、「広場」である教室を自覚せず、周りの多くのクラスメイトを無視し、目の前の相手にだけ伝える言葉であろう。それは、目の前の相手以外には「noise」となるのである。あるいは、誰も受取手のない言葉を、だからこそよけいに大きな声で言う。そういう「noise」もあるだろう。そうではなく、「クラスメイト一人ひとりに伝えたい」と願って言葉を発する。そして、「この言葉は私に向けてのものだ」とクラスメイトが受け取る。そういう言葉のやりとりが成立すれば、そこで生じる言葉は「noise」ではなくなるだろう。

あるいは、「いじめ」「からかい」でしか他者と関われない。クラスメイトはそれをやめさせるすべを知らないから、身を固くし「沈黙」するしかない。そういう「重苦しい沈黙」のクラスにおいて、

「言葉が相手に届く、クラス全体に届く」「相手の言葉を受け取る」経験を重ねることで、その問題を解決していく力もつけていこうと期待したい。

筆者が行う「プレゼン演習」には、先に述べたように、「相手に届く、相手を説得する、相手に感動を届ける」、「遂行的」な意識をもたせたい。「自己表現の言葉」と「広場の言葉」を模索しながら、目の前のクラスメイトに届く言葉を作ろうとする。プレゼンする者は相手に届く言葉を意識し、聞く側はその言葉を受け取る。そういう機会としたい。

「noisy」でもない「重苦しい沈黙」でもない、「子どもたちが自己を表現し、言葉で他者と関係を持つ」てるよう「プレゼン」し「聞き合う」そういう「プレゼン演習」を作りたい。

3 実際の「プレゼン演習」

3-1 実際の、目の前の生徒たちと「聞き手の持久力」というものさし

「実技」である。誰もが「話す」も「聞く」も繰り返し経験する。つまり、クラスのすべての生徒に話す機会を作る。それは同時に「クラスのすべての生徒がクラスのすべての生徒（自身を除く）の語りをすべて聞く」ということである。話し手はプロではない。「話す」経験が乏しいからこそ「話す」経験が必要な中学生である。そんな「素人」の話を聞き続ける持久力がこの「実技」の実施を支える。

平成20年度現任校に赴任し、1年生を担当した。生徒数は、1学年は150人ほど。多動傾向の生徒の率がやや高いように感じた。飽きればすぐ立つ生徒や、瞬発的に発表者をひやかすことが予想される生徒も見られた。平成20年度は「プレゼン演習、つまらない!」という雰囲気を作ることも予想され、しばらく行わないと判断した。

「プレゼン演習」へ向けての準備ともいえる活動は行った。

3-2 「プレゼン演習」開始への「ベースづくり」

第1学年で「プレゼン演習」に繋がるだろう、という実践は、次の通りである（詳しくは、『自分のできる』学び手を育てる 平成20年度、鳥取大学附属中学校第1学年国語科の取り組み』（『鳥取大学教育研究論集』創刊号 2011）

- ① 漢字学習時、漢字の発問とヒントを口頭で行う。（集中して聞き取る時間をつくる）
- ② 折々に、「全員意見プリント」（4から5cm四方の紙に各自がテーマに沿って書き、それを一枚物のプリントとし印刷して全員で読みあうもの）
- ③ 本編単元「具体と抽象」で生徒自作問題を持ち寄り、分かち合う。
- ④ 春休みの課題として「漢字100問生徒自作プリント」を持ち寄り、分かち合う。
- ⑤ 声を出す取り組みとしては、「○読み」を年間通して行った。

3-3 2年でスタート、その直前

2年となり、5月に教育実習を迎えた。漢字コーナーの後、授業見学に来てくれる実習生に、「1分間プレゼン」をしてもらった（1年生の時も折々にしてもらっていた）。

一方、生徒へは「全員プリント 6連休と言えば」で全員の言葉に注目し、筆者の読み上げに傾聴する機会を作った。「全員の言葉を受け入れる」という意志と体力が「ルーティン化」を目指すプレゼンには必要であろうし、そのためには「全員の言葉を受け入れることが楽しい」という経験の積み重ねが大事と考えている。

実習生のプレゼンを聞く姿や全員プリントを読み合う姿から、ある程度聞き続ける「持久力」はあるかな、と判断した。冷やかしたり、落ちつきなく動き回ったり、それにつられたりという姿がなかったからである。

3-4 2年での「プレゼン演習」

3-4-1 2年時の1周目～8周目(資料1, 2, 3, 4, 5)

1周目

1周目は「とりあえず始める」が目標であるので、最低限のルールしか考えていない。「続けてやる予定だが、態度次第(馬鹿にしたり、発表できずに凍る生徒が多々あるなど)では第1回のみで終わるかも」とスタート時に伝えている。

1周目の「最低限のルール」5月下旬～

「発表者は前が出る」「前でみんなに届く声を目指して発表する」(それができればまずOK)。

「聞き手は発表者の発表に耳を傾ける」「発表後に拍手する」。

発表時間は1分間とし、1回あたりの発表者は5人。

順番は、出席番号順。

テーマはとりあえず「自由」。

「テーマ自由」が発表しやすいかどうかはよく分からない。が、そのときは縛るより「自由」に何か出し合うことで「プレゼン演習」の手応えを探ろうとした。

1周目は、私も聞くこと(聞き楽しむ態度も含め)に集中することにしたので、メモもとっていない。記憶では、発表内容は部活が多く、「部活、こんなところがおもしろい」「先週試合をしてその結果」のようなものだった。

発表者は想像以上に緊張していた。聞き手は私語せず聞き、楽しむ表情も拍手もあった。「聞く態度がよいので、2周目もやる」と伝えた。「続けることで、時間をかけて自分の力をつける」意識づけとともに、「続けるということは、これから先、馬鹿にした態度をとると、次に自分にもそういう態度が向けられる可能性があるということ」という意識づけもした。

2周目 変更点「順番はくじ」「教師の記録も開始」7月中旬～

2周目もテーマは自由。時間は1分程度、発表者は1回5人。2周目からは順番をくじで決めることにした。「運次第の順番」というのも少しアクセントになると考えた。

2周目からは、筆者が記録を始めた。音声の特性上、形が残らない。形が残らないと生徒自身、毎回10分から20分使うこの活動に不安を覚えるかもしれない。まず、「教師がちゃんと記録とてますよ」という態度を見せる。ただし、「聞き手」には1周目同様メモはとらせていない(聞くことに集中し、拍手もしっかりやる習慣を作るため)。

2周目ではテーマが1周目に比べ多彩になったように思う(1周目は筆者は記録をとっておらず、正確なことはわからないが)。生徒の発表内容等、資料編にあげた。

「みんなの前でいえれば大満足！」で細かい指導は入れない。

発表時間は30秒程度が半数。「語り方」は「メモをそのまま言いました」という感じを受ける発表が多かった。もちろん、筆者は、目標として掲げたとおり、「みんなの前で言える」ことが大事、という姿勢をとり、内容や語り方の細かい指導はしていない。メモ読み上げだけで「大満足！」くらいの感じで生徒諸君にプレゼンを勧めた。その上で、テーマが面白ければそれを楽しみ、ディテール

が面白ければそれを楽しむ。

「語ると反応があって楽しい」「人の語りを聞くのが楽しい」という感覚を育てることがこの演習の「ルーティン化」を支えると考えた。

3周目 2周目と同じ方法 9月中旬～

3周目もまた、くじで順番を決め（結局、卒業まですべて順番はくじで決めた）、テーマは自由とした。時間も1分程度、1回あたり5人の発表とした（これも卒業まで同じ）。

4周目 変更点「生徒各自のメモの機会を作る」「メモは五つの単語で」10月下旬～

4周目。3周目と変えたのは、「聞き手によるメモ」を開始したこと。「聞いたプレゼンを五つの単語でメモ」と指示。記録用紙を配布。

メモをとることで、「聞く力」の「メモ力」みたいなものが見つからないか。「聞き流す」のではなく、「残る」ことで充実感も生まれるのでは、と考えた。「充実感」が「ルーティン」を支える力となるだろう、と考えた。

五つの単語という制約をつければ、メモの負担も少なく、メモの時間の個人差が広がらずにすむのでは、と考えた。

5周目(11月下旬～)、6周目(1月中旬～)、7周目(2月上旬～)、8周目(3月上旬～)

やりかたは4周目と同じ。

3-4-2 2年の「プレゼン演習」を終えて

2年時では、「プレゼン演習」の「ルーティン化」が最大の目的であったようだ。

生徒の何がどう変わったか、資料から具体的に語ることは難しいが、「シリーズ化」するもの。「科学的思考力」を見せるもの。「ずらし」をめざすもの。など、それぞれの生徒の「特色」といったものも見え始めている。

3年生になって、何人もが「プレゼンはいつからですか」と聞き、また、「プレゼン再開」を伝えても、ブーイング的なものは筆者に伝わって来なかった。「2年で8周した後、3年生でのプレゼンを全クラス、ブーイングもなく再開できた」という事実をもって、生徒諸君が「聞く」「話す」を楽しんだ、あるいは、「ルーティン化」を受け入れた、と理解することにする。

3-5 3年での「プレゼン演習」

3-5-1 条件をつける。条件を変える。

3年生となっても、

- * 「帯单元」で毎時間。授業の中の10分から20分を使っての演習。
- * 1人1分間をめやすに、教卓のポジションで、クラスみんなに向けて、話す(伝える)。
- * 毎回、5人が順番で。(「ルーティン化」)
- * クラス全員がやる(必ず自分の出番がある)。
- * 順番は毎周(1周とはクラス一巡)ごとにくじで決める。
- * 聞き手は記録用紙にメモを取る。

というルールは変えていない。

新たに、次の二つを加えた。

- * 「テーマ自由」ではなく、「テーマ」を指定する(各周によってテーマを変える)。
- * 発表者は、「プレゼン提出・保存用プリント」にプレゼン内容を記録する。

この「提出・保存用プリント」は、原稿用紙代わりにもなっていた。発表内容の記録だけでなく、「伝える工夫」の欄を設け「具体」「似てる」「対比」「その他」の「工夫」を書かせた。それにより、「どう書くか」という「メタ認知」の感覚も育てようとした。（「聞く」記録用紙にも「具体、たとえ、対比」などメモ書きするように指示した）

さらに、6週目より、「再現」も行った(資料7, 8, 9, 10)。

*** 聞き手は、クラスのみみんなのプレゼンを聞いた後、「プレゼンで『メモと記憶をもとにした再現力』をつける」プリントに友達のプレゼンから一つ選び、再現する。**

3-5-2 「プレゼン再開」直前の活動 「『好きな○○』の○○を持ち寄る」

3年の授業開始してまもなく(プレゼン演習再開前)。「好きな○○」の「○○」に入るものそれぞれが出し合う、という活動をした。それぞれが10個程度用意し、順番に全員が発表。前の人の人に「かぶらない」ことを指示した。

例えば、3年A組。「食べ物」「俳優」「色」「CM」「動物」といった比較的耳になじみのあるもの。「ノート」「そうじ場所」など中学生としてこだわったり、悲喜交々だったりすることから。「ポテトチップスの味」「うまい棒」「チロルチョコ」など、たしかに細分化された好みがあるだろうと思われるもの。「牛乳」とか「お米」とかささらには「とよのか(イチゴの種類)」などとなると、それを識別する味覚の鋭さに感嘆したり、「タオルのやわらかさ」「入浴剤の匂い」など「たしかにある」とその選択に感じ入ったりした。中には、「自動ドア」をあげ、「○○の自動ドアの開くスピードと感じがよい」という者もいた。「選択」の大事さ、楽しさを実感する、という時間になったようである。「牛乳」とか「お米」で終点でなく、そこから「大山乳業」と「明治乳業」の違いや「こしひかり」と「あきたこまち」の違いまで問おうとするおもしろさがあった。「抽象から具体」の思考でもある。

3-5-3 3年時の1周目～9周目(資料1, 2, 3, 4, 6)

1周目「好きな○○」(自分で○○を埋めて、それについてプレゼンする) 5月下旬～

2周目「好きな○○」(自分で○○を埋めて、それについてプレゼンする) 6月下旬～

3周目「好きな○○」(自分で○○を埋めて、それについてプレゼンする) 8月下旬～

4周目「○○といえば」 9月下旬～

「春」「夏」「秋」「冬」「平日」「休日」「買い物」「乗り物」「正月」「お盆」「クリスマス」「充実感」「ひまつぶし」の13種類のテーマを提示。くじで順番とテーマが決まるというルール。同じテーマでほぼ3名が発表することで、「同一テーマでもバリエーションがある」という「パラダイグマの感覚」を養おうとしている。

5周目「○○といえば」 10月中旬～

テーマを生徒から募集。その中から筆者が13項目に選んだ。

「ファーストフード」「集中できる場所・時」「動物」「楽しいとき」「雑学豆知識」「青春」「100円ショップ」「鳥取」「イラスト解消法」「植物」「食べ物」「祭」「スイーツ」

6周目「○○といえば(ことわざ編)」(「再現力」の活動も開始) 11月中旬～

これも生徒から募集したものを筆者が19項目に選んだ。19項目としたのは、38人クラスであるので、同一項目を2人にプレゼンさせるためである。「同じ項目だけれど、切り取り方やつなぎ方がちがう」という感覚を育てたいためである。

「石橋を叩いて渡る」「海老で鯛を釣る」「雨垂れ石を穿つ」「立つ鳥跡を濁さず」「情けは人のためならず」「塵も積もれば山となる」「覆水盆に返らず」「井の中の蛙大海を知らず」「聞くは一時の恥聞かぬは一生の恥」「三つ子の魂百まで」「猫に小判」「河童の川流れ」「仏の顔も三度まで」「鉄は熱いうちに打て」「傍目八目」「けがの功名」「棚からぼた餅」「魚の目に涙」「縁の下の力持ち」

「ことわざ」をテーマとしたのは、自分の体験等を結びつけることで「アナロジー」の力を養おうと考えたからである。自分で考える。友達のを聞く。そういう繰り返しが「アナロジー」の力を鍛えるのでは、と考えたのである(4-3参照)。

また、この周から、全員聞き終えた後、生徒各自が「聞き応えがあった」と思う作品一つを選び、自分のメモをもとに「再現する」という活動を加えた(4-4参照)。

7周目「〇〇といえば(ことわざ編)」12月中旬～

6周目と同じ構造とし、使用することわざを替えた。

「好きこそもの上手なれ」「犬も歩けば棒に当たる」「青菜に塩」「船頭多くして船山に上る」「天知る地知る」「漁夫の利」「ローマは一日にしてならず」「伝家の宝刀」「夏は日向を往け。冬は日陰を往け」「挨拶は時の氏神」「案ずるより産むが易し」「背水の陣」「大海の一滴」「蝸牛角上の争い」「三人寄れば文殊の知恵」「取らぬ狸の皮算用」「釈迦に説法」「雨降って地固まる」「策士策に溺れる」

8周目「〇〇が△△する,なる物語」紹介 1月中旬～

9周目「〇〇が△△する,なる物語」紹介 2月上旬～

「〇〇が△△する,なる物語」という紹介の仕方は石原千秋(2002)の方法に依った。本編での「大人の階段のぼる」という小説読解の単元と連動した企画である(4-3参照)。

4 「プレゼン演習」を終えて

4-1 「帯单元」による「ルーティン型プレゼン演習」

4-1-1 「ルーティン」だから「繰り返し」が保障される

「プレゼン演習」を「帯单元」で連続して行った。

「イベント型(「プレゼン大会」など)」にしなかったのは、短期間に全員にさせると、長い時間聞き続けなければならない、結果だれる可能性が高い。しかも、「自分の出番は1回だけ」になり、力や自信をつけることはむずかしい。だから、「帯单元」で、しかも、1周して終わりではなく、2周目、3周目と続けた。「ルーティン化」である。

「ルーティン」とは「きまりきった手続きや手順。また、日常の仕事。日課。」といった意味である。「ほぼ同じような活動を何度も繰り返す。習慣化されたもの」という意味合いで使っている。

「イベント型」と違い、「ルーティン型」であれば、そのくり返しによって「話せる自信」や「聞ける自信」が実現されやすいのではないかと考えた。部活動において、毎回シュート練習など行い技術と自信を磨くのと同じである。

2-2に「話し言葉教育のいっそうの重視」と掲げたが、すでに述べたように細かい技術指導といったものは行ってはいない。発声練習をするわけではなく、発表のフォーマットを細かく指示するわけでもない。ただ「ルーティン」によって「自分の出番も必ずある」という状況を継続させた。「自分の出番」があることで、生徒たちが友達の発表の仕方から学ぼうとし、自分の発表を工夫することを期待した。

4-1-2 「ルーティン」は「繰り返し」、つまり「次の機会がある」

「ルーティン」のよさは、「次の機会、やり直しの機会がある」ということでもある。緊張しながら「プレゼン」をする。真剣にやっても、あるいは真剣にやればやるほど、「こうしておけばよかった」が生まれる。「次の機会」とは「『こうしておけばよかった』を活かす機会」である。「ルーティン」により「次の機会」が保障されることで、「こうしておけばよかった」も考え甲斐が増す。この「次こそはこうしよう」が上達を支える。

この演習の間、「ちょっと準備不足でした」とか「途中からぐだぐだになっちゃいました」という後悔をたくさん聞き、「次はもうちょっと準備します」とか「整理してみます」という「次への意欲」もたくさん聞いた。最終週のプレゼンでは「次がない!」という危機感を訴える生徒も多かった。ある生徒は最終周の後、「しくじっちゃいました。もう一度、チャンス作れませんか」と何度か私に尋ねた。「次」のある「ルーティン」のよさを「次がない」ときに実感したのである。

4-1-3 「ルーティン」による「繰り返し」は「友達からの触発」も多く生む

「ルーティン」による「繰り返し」は後悔による「こうしておけばよかった」だけではなく、友達の発表に触発される機会も増やす。触発される内容は、プレゼンに向かう姿勢でもあるだろうし、内容の選択や話しぶりでもあるだろう。4-2で述べるが、友達の発表に触発され、「パラダイグマのひろがり」の感覚は育てられる。「パラダイグマのひろがり」の感覚が育つことでより多彩さは生まれやすくなる。もちろん、指導者自身も生徒たちの工夫や脱線も「多彩さ」と愛で、楽しむことが必要である。

学校で「聞く」「話す」力は完成されない。「ルーティン型プレゼン演習」の繰り返しが「自分のプレゼンを反省的に捉える」作法や「友達に触発されたことを自分のプレゼンに活かす」作法を鍛えるとすれば、学校から離れた後の「自己学習力」（例えば、営業の先輩のやり方を自分に取り入れる、とか、バラエティ番組を「話し方」の見本として観る、など）にもつながるのでは、と期待する。

4-2 「持ち寄り」「分かち合い」と「パラダイグマ」「シンタグマ」の学び

「持ち寄り」とは、生徒それぞれがアイデアを持ち寄ってくることであり、「分かち合い」はそれを共有することである。

「みんな」などとおおざっぱに括られ、あるいは、自らも括るけど、その「みんな」もそれぞれいろいろな経験をし、いろいろなことを考え、いろいろなアイデアを持つ。そういう多様性が前提にあってこそ、「自分も話そう」とか「友達の言葉を聞こう」と思え、自分が話すことや相手の話を聞くことが楽しいと感じられるだろう（ときには、逆に、「みんな、ばらばらだろう」と思っていたけど、「いっしょ!」と思う喜びもあるが）。（「持ち寄り」「分かち合い」について詳しくは、拙稿『答え』とのつきあい方、知ってるもん『月刊国語教育』東京法令2011年2月号）

「その話題できたか!」というような「多様性を楽しむ」の「多様性」を言語学のいう「パラダイグマ」で理解している。「()の中に入れるものをいろいろ考える活動」などと説明するが、しだいに「パラダイグマ」という用語も使い、定着を図ろうとした。

「安定のある選択（「自動化」）」しかできない生徒（つまり「パラダイグマ」の範囲が狭い）が「飛躍のある選択（異化）」する生徒（つまり「パラダイグマ」の範囲が広い）の発表を聞き、その選択の幅を楽しみ、学ぶ機会となっているだろう。

それらの「パラディグマ」の広がりとしては、まず「話題」のひろがりを見せてみる。たとえば、「好きな○○」では、「○○」に何を選ぶか、というパラディグマの広がりが意識されたであろう。各周、テーマに対し、どのような話題を選んだか、1クラス分（2年A組、3年A組）を資料にあげた（資料5, 6）。例えば、「好きな○○」では、「好きな色」「時間」「漫画」などから「入浴剤」「シャープペンの出具合」「チュッパチャプスの味」「チュッパチャプスの舐め方」などさらに「細かさ」を語るものや、「プールの水」にも「好き嫌いがある」と気づかせたものなど（この生徒は水泳部）、その「細かさ」や「選び方」にバリエーションが見られ、生徒同士刺激を与え合ったようである。

一方、「その展開できたか」は「シンタグマ」と言えるだろうが、こちらは今回それほど強調していない。しかし、例えば、「ひろき」（資料2）は、3年1周目では「一週間における日曜日の位置」と、「1年間におけるボーナスの位置」が「似てる」とアナロジーを意識した語り方で展開した。3周目でも「アイスの序列」を「平サラリーマン」「部長」「社長」で言い表し、アナロジーを用いた。また、「あやか」（資料1）は2周目では「好きなCOPIの色」を発表、伝えきれなかった後悔をもとに3周目「好きなCOPIの色～part2！～」として実物見本を持ち「ショウ&テル」を行った。

このような「パラディグマ」の広がりや「シンタグマ」の妙が「聞く楽しさ」をつくり、「ルーティン」を成立させ続けた原動力となる。さらには、「自分の出番がこれからある」という状態でくりかえし聞くことで、「世界から何を切り取ってくるか」という「パラディグマの感覚」を鍛える「題材指導」となり、「アナロジーを用いる」「見本を見せる（「ショウ&テル）」など「構成をどうするか」という「シンタグマの感覚」を鍛える「表現法指導」となるだろう。

生徒たちが3年最後の授業に感想等を記した「鳥取大学附属中学校 国語科での学び」というプリント（以下「国語科での学び」）の「3年間の国語科での学習を通して、印象に残っていることは」の質問に「プレゼンを2年からやっていて、いろんな人の意見が聞けた」「プレゼンで思わぬテーマを持ってくる人がいろいろいたこと」などその選択の広がりについて記している者も見られた。また、「3年間の取り組みを通して、この人すげー、とか、この人に影響を受けた、という人（筆者とか作品とか同級生とか）を書き上げなさい」という質問に対しては、プレゼン演習で印象に残った同級生の名を挙げる者も多かった。「○○くんのプレゼンはただしゃべるだけじゃなくて、その中にいっぱい技がつまっていてすごくおもしろかった」「クラス全員。プレゼンで、いろんな知識を得ることが出来た」など「どう述べられているか」や「話題の広がり」について書く者もいた。

4-3 「具体と抽象」「似てる」「○○が△△する物語」など、本編の定着の場

1年時本編（帯单元以外を「本編」と呼んでいる）の「具体と抽象」という単元で、「具体から抽象」「抽象から具体」という思考力を鍛えようとした（詳しくは、拙稿「『具体と抽象』を意識し、読める・書ける・話せる・聞ける」『月刊国語教育』東京法令2010年12月号）。「プレゼン演習」では当初から用語として「具体」「抽象」を使い、それらを使うことを勧めている（特に3年時）。

また、1年時から「似てるスペシャル」としてアナロジーを意識させる実践を本編で单元化し、その後も2年、3年と「似てる」を見抜く力を意識させてきた（詳しくは、拙稿「『似てる』の力で『世界』と自分をつなげられるもん」『月刊国語教育』東京法令2011年1月号）。「プレゼン演習」でも、提出用紙や記録用紙に「似てる」の欄を設けたり、テーマを「ことわざと似た経験を発表」とすることで、「アナロジー」を意識し実際に作品をつくる場と共有する場としようとした。

3年時8周目9周目は「○○が△△する、なる物語」として作品を紹介するプレゼン演習をおこなったが、これは、3年時11月～2月に本編授業「大人の階段のぼる」という小説の読みを鍛えよう

とする実践とつなげる試みである。その単元の目的の一つ「〇〇が△△する、なる物語として作品を説明してみよう」を「プレゼン演習」で生徒自身が選んだ作品(小説が望ましいが、それに類するもの、マンガ、ゲームも特に拒まない)で発表するというものである。

このように、テーマ設定の工夫によって、本編とプレゼンをつなぎどちらも充実させることがまだまだできるだろう、と「プレゼン演習」をやりながら考えるようになった。

4-4 「再現」という表現力

2年の4周目から「聞いたこと」を記録するためにメモを取る活動を入れた。「メモを取る」というのも、「ルーティンでつけていく力」だと考えた。ひとまとまりの内容を手際よく書きとめようとする機会を作ろうとした。もちろん、メモによって、「聞いたこと」を記録し、各自の発表に生かせたら、とも思った。

それらのメモを活用する機会を作りたいと思い、終盤ではあるが、3年の6周目から9周目まで「再現」という活動を作った(資料7, 8, 9, 10)。「いくつかの単語のメモをもとに、ひとまとまりの内容を話せる」という力は実際の生活でも使える力だろう。そこには複数の単語を結びつけてストーリーを構成する、という力が必要であり、自分の知識と複数の単語を結びつけいく「肉付け」の力みたいなものもあるだろう。書き出しや締めくくりなども記憶だけではなく、それぞれの工夫が必要だろう。「他者になりきって他者の作品をメモをもとに再現する」というのは何か意義があるだろう、と予感しおこなった。

まだ、行ってはいないが、例えば、「プレゼン」と「再現」の違いや、同じ「プレゼン」を「再現」した作品同士の違いなど見ていくと、何が残され何が削られたか、言葉が少し入れ替わっただけでどのような違いがあるか、といった学びにもつながるだろう。例えば、3年8周目の「ひろき」のプレゼンを「しょうと」と「ともか」が「再現」している(資料8, 9)。「しょうと」はイタズラの内容を中心に「再現」しており、「ともか」はきびしいルールの裏をかいたイタズラとその失敗も書き足している。同じものを「再現」しても、それはそれぞれ違った風合いを見せる。「見え方」「語り方」といった学びにつながりそうである。また、9周目「あやか」プレゼンを「ひろこA」が「再現」では、固有名詞や内容で知らないことはあるのだけれど、「？」をつけながら、ざくっと再現していく、そういう力を感じる書き方になっている(資料10)。細分化された情報の中生きていく生徒たちである。「共通の話題」が、昭和生まれ昭和育ちの私たちに比べずいぶん少ないだろう。その中で、「よく知らないこと」もとりあえず「？」をつけ、あらすじを理解していく、といった作法もより必要になるだろう。

「再現」は、「復唱」である。「聞くのが苦手」な生徒には日常生活でも「単純な復唱」が役に立ちそう、と時々おこなっているのも、「再現」はその「文章バージョン」と考えている。

自分の「メモ」が役立つものかどうかの確認にもなるだろう。

4-5 「聞く」「話す」の繰り返しの経験が作り出すもの

「プレゼン演習」の「ルーティン」そのものが直接生徒たちをどう育てたか、知ることは難しい。短期的な活動の前で目立った変化があれば、それが「成果」であると推し量ることもしやすかろう。しかし、約2年間の取り組みでどう変わったか、と知ろうとしても、そこにはさまざまな出来事があり、それら一つ一つが生徒たちに変化を促している。ここでは、生徒たちが「成長と感じた」と記していることから、「プレゼン演習」で得た「成長」を想像してみる。

4-5-1 「話せる」「発信する」自信を作り出した

「国語科での学び」での「齋藤へのメッセージ」に、「私は人前で話すのが苦手だったけど、プレゼンでかなりなれることができました。」「先生がプレゼンをはじめてくれたおかげで人前で緊張せずに話せるようになった。」「プレゼンのおかげで面接とかががんばれそうです」「プレゼンする力がついてよかったです」「先生の授業はプレゼンとか楽しくて、ねむくなったりとかぜんぜんしなかった唯一の授業でした。プレゼンはこれからもつづけたらいいと思います。私も高校でがんばろうと思います」など、記す生徒が多かった。

3年後中間テストの表現問題「過去と未来をつなぐ 中学生活と十年後の自分」に「ゆうき」は次のように述べている(資料12)。

僕はこの附属中学校での3年間でたくさんの経験をつむことができました。たとえば、将来に直接つながっていく勉強や、友人たちとの交流とかが大きなところだと思います。ほかにもあまり人前で話したりすることが苦手でできるだけ避けようとまでしていた自分にとって国語科でやったプレゼンといった取り組みはその苦手をこくふくするためのとてもいいチャンスになりました。この人見知りといった苦手意識はなくなたくさんの人とかかわっていかなくてはいけない社会に出てからにとっても大きなマイナスになっていくんだろうなあと自分でも少し不安になってった部分はあったので、今からでも少しずつならしていくことはとても大切かつ将来につながっていくことだと思います。まだ十年も先のことは分からないけど自分の個性を生かせるような職業につきたいと思います。

4-5-2 取り組みの姿勢の変化を作り出した

理系の成績は入学時からよいが国語に苦手意識を持っていた生徒は、「国語での学び」の「齋藤へのメッセージ」に、次のように書いている。「国語科ほど苦手なものはない僕でも、今となっては、国語科は好きになってきた。成績の面でもよくなってきているようだ。」そして、この生徒は「3年間の学習を通して、『この力をついたのでは』というものを書き上げなさい」に、「プレゼンによる、長時間で考える力」と書いている。つまり、「ルーティン」として繰り返す「プレゼン演習」を「考える機会」と捉え、一回一回考えることで力をつけてきた実感を得たのだろう。

「しき」は、プレゼン開始当初、20秒ほどの、ときには14秒の、ほとんど「ひとこと」といったプレゼンをおこなった。それが、3年の途中からずいぶんと内容を充実させてきた(資料3)。その「しき」は「3年後中間テストの表現問題」(資料11)に次のように述べる。

僕は附属中学3年間の国語の授業で色々な経験をした。中でも「プレゼン」の授業ではたった20分ほどの少ない時間の中に多くを学んだと思う。初めのほうでは「話すことがない」とか言いながら工夫も何も考えずにダラダラと部活の話をしてた。でも友達みんな表現や自分の意見など多彩な工夫をしており、話自体も凄くおもしろかった。だから最後のほうでは僕も、自分の知らなかったことやいろんな話をテーマに沿って話したりした。

この経験にさらに磨きをかければ将来の会社のプレゼンテーションなどでも役立つと思うし、知らない人とのコミュニケーションにも役立つと思うので残りの国語の時間、大事にすごしていきたい。

「友達」からの触発を受け、「最後のほうでは僕も、自分の知らなかったことやいろんな話をテーマにして話した」とあるが、たぶん5周目のことだろう。「ファーストフードといえは」というテ

マに対し、「マクドナルド」の「ハッピーセットのぜんぜんハッピーじゃない話」を『おいしいハンバーガーのかわいい話』という文献から展開した。また、「〇〇が△△する、なる物語」では、『永遠の0』と『ジョーカー・ゲーム』を丁寧に紹介している。

4-5-3 「受け止めてくれる隣人」という信頼を作り出した

個々人の「話す力」や「聞く力」を育てるだけではなかろう。くり返し、「自分の話を聞いてもらう」。くり返し、「友達の話に聞き入る」という経験は、クラスへの信頼を生み、また、クラスの友達から信頼される自分をつくるだろう。そして、その信頼の上に次のプレゼンが作られていく。

「あやか」は自分の大事にしている音楽や映画などを毎回発表していた(資料1)。その受け止められた経験を、「3年後期中間テストの表現問題」に次のように書いている。(資料13)

私がこの中学3年間で学んだ大きな事。それはコミュニケーションだろう。私にとって、国語の授業はとても新鮮だった。今までやってきた国語はなんだったのだろう!!そうとしか言い様がない。なかでもプレゼン。人前に出て話すという行為に、少なからず抵抗があった。でもここでは違った。話すこと全てを受け止めてくれる仲間がいる。空間がある。話すことってこんなに楽しいんだ!!私は今、話すことが好きだ。

「パラディグマの感覚」や「シンタグマの感覚」を大事にするということは、「ありきたりの選択」ではなく「異化」を大事にする、ということでもある。中には、「こうだい」のように、友人を誘い「掛け合い漫才」の方法でプレゼンを行うものもある(資料4)。また、資料にはあげていないが、「1人1分」を大幅に超えるプレゼンをする者も学年全体の中で3名ほど現れた。そこで、「剣道の試合の詳細」を語り、「カードゲームの歴史と展望」を語る。そういう「量的密度的ずらし」を筆者もある程度許容した。生徒同士でもブーイング等聞こえず、許容していたのだろうと理解している。

「こうだい」は、「卒業文集」に「さいとう先生」を「仲間」と捉えた一文を書いた。

ぼくは今まで何か持ってると言われてきました。それは仲間です。(略)

さいとう先生。あなたなしではこの3年間はかたれないだろう。あなたは二、三年の担任だ。ぼくが今まで出会ったどの大人ともちがった。あたまごなしにおこらない。けしてぼくを否定しない。そのおかげでぼくはもう一人の自分を見つけてしまった。一年生のころのあなたは何を言っているのかさっぱりわからなかった。でも、今ならわかる気がする。十年後……のみつれてってな。(資料15)

「プレゼン演習」だけで生まれた関係ではないが、自分なりの「異化」を許容された経験からの言葉だろう。「プレゼン」での「異化」を受け止められる経験を重ねることで関係が変わり、また「プレゼン」の内容も変わる、そういう往還があるのではないか。それは、教師と生徒だけでなく、当然、生徒と生徒におこる往還でもあろう。

5 実践の難しさとこれからできそうなこと

5-1 「ルーティン化された長期的取り組み」を記録し、見直すのはむずかしい。

「帯単元」の方法に関することであるが、これら「帯単元」の取り組みを記録し、その資料を蓄え、整理することはずいぶん手間がかかる。今回の実践でも、「聞き手によるメモ」の記録用紙や「それぞれの原稿用紙」「プレゼン提出・保存用プリント」「再現プリント」など、紙による記録などボリュームある資料を見渡したり、整理することは大変であった。しかし、より難しいのは、それすらもとらせていなかった2年時は筆者自身のメモのみが残された記録となっていたので、再現が難しかった

た。授業実践全般に言えることだが、教師は、授業の企画、運営、記録、評価などほぼ一人で行う。日々の授業の合間に、これらの記録用紙などを見渡し整理することはけっこう大変なのである。

5-2 「聞く」「話す」様子を記録することもむずかしい。

「どう聞いたか」、そのものは記録できない。「聞いた」結果として文字にしたものしか残らない。「話す」も同様。消えてしまっている生徒の声をそのまま記録することは出来ない。今回は、私のメモと生徒のメモで再現を試みた。「ビデオで撮る」のも簡単ではないはずだ。毎回の機器のセッティングだけでなく、もし記録を撮ったとしても、その記録を見ることが膨大な時間となる。そのような時間の保障は現実には難しい。

さまざまな「やるべきこと」のある教育現場でどう時間を作り出すか、あるいは、限られた時間でやれることを絞り込むか、そういったことが、課題である。

5-3 「ルーティン化」はやりがいがあるが、「飽きること」との戦いでもある。

そのむずかしさを自覚し取り組みたい。本実践では4クラスとも、倦むことなく続けられた(はず)だが、例えば「からかい」が起きやすい状況であったり、多動傾向の生徒が多く落ち着かないといった状況であれば、それなりに準備期間も必要であるし、形態も改めていく必要がある。

現在1年生担任であるが、どのタイミングで始めるか、思案した。単に「始めればよい」というものとは思っていない。1年生の最初の緊張感での『よい子』時期に始めて、その後、『よい子』が失速してもつまらないし……」などと「聞き手の持久力」など見ている。1月(つまり、入学して9ヶ月がたち、クラスにも慣れ、級友の動きが把握されたあたり)に開始しようとしている。これくらいで始めると、いたずらにはしゃぎすぎず、「ルーティン化」しやすいのではないかと判断している。

5-4 テーマの工夫でより充実を作れそう。

立ち上げ期8周も「自由」とし、その後、9周はそれぞれテーマを考えた。テーマの工夫は筆者自身にパラダイグマの力を求める。

例えば、「ことわざ」と同じく「似てる」の思考力を高めるために、「『論語』(あるいは説話など)と「自分の経験」をつなぐ」も考えられるだろう。「詩の紹介と解釈」とか「絵本紹介」とか、「紹介シリーズ」もあるだろう。3年8周目9周目でおこなった「〇〇を△△する、なる物語」という本編授業との連動はおもしろく感じた。

5-5 「話す」だけのプレゼンでなく、目的(「宣伝」とか「説得」など)のために「現物」や「映像」を用いる課題設定も考えていきたい。

コンピュータ(パワーポイント等)を授業に用いることが筆者にとってまだ「オンデマンド」になっていない(筆者のコンピュータ操作能力の低さだけでなく、これもまた、機器のセッティングや生徒の準備をどう保障するか、といったことがひっかかっている)。ただ、紙芝居風とか絵コンテ風など「やれる範囲」でのアナログでの対応も楽しそうだと考えている。

資料編

資料編について

①表記等

生徒が書いたメモや文章の表現(漢字等)はそのままの形で資料化するように心がけた。ただし、段落の行かえは◆で表した。
*生徒のメモ等に「g」「t」「m」「k」とあるのは、「g=具体例」「t=対比」「m=たとえ(メタファー)」「k=解釈」

の意。授業内のローカル符丁。その他に生徒独自の符丁もみられるかもしれない。

* (〇分〇秒)あるいは(〇秒)とあるのは、プレゼンの時間。毎回はかっている。

* (伝える工夫 具体「ほふくぜんしん」。似てる「戦争映画のように」対比「今の状態」)(出典等 天地明察)などとあるのは、プレゼンした本人が「記録用紙」に「伝える工夫」としてメモ書きしたものや「出典文献」を明記したものの。

② 資料の性格

音声言語である「プレゼン」の再現はむずかしい。本編に記したが、2年第1周は、筆者もメモを取っていないので、「プレゼン内容」を再現できない。第2周と第3周は筆者のメモをもとに再現している。第4周より第8周(2年最終周)までは聞き手である生徒のメモと筆者のメモをもとに再現した。3年では第1周より第5周までは、「プレゼン」する本人による「提出・保存用プリント」の内容をもとに再現した。提出されていないものについては「聞き手によるメモ」と筆者のメモをもとに再現した。

ただ、プレゼンする者は、「提出・保存用プリント」そのままに「プレゼン」するわけではなく、音声の文字化によっても、ずいぶんと実際の「プレゼン」とここに挙げた資料では感じが(時には内容自体も)変わってしまうだろう。そういう性格の資料である。

③ 資料の構成

構成は、まず、4名の生徒の「プレゼン作品」をそれぞれ通時的に並べた。内容の選択の仕方、量、書きぶりなどの変化を見ていきたい。次に、「パラディグマ」、選択の幅を見るために、2年時、3年時ともA組の全員分の「話題」(齋藤がメモでそう記したものや本人が記録用紙に記したものを元にしている)を羅列した。さらに、「再現」の作品をあげ、最後に、「卒業アルバム」等に記された生徒たちのプレゼンに対する考えなどをあげた。

④ メモ、再現について

「聞く」「受け取る」こともこの「プレゼン演習」の大きな目的であることは本編4-4で述べた。「メモ」は2年4周より、3年最終周まで行った。資料では、2年4周と3年最終週のプレゼン資料に、メモの具体例「(ひろこTメモ:……)」をいくつかつけておいた。

「再現」は、4-4で述べたとおり、「他者になりきって他者の作品をメモをもとに再現する」という活動である。3年の6周目から最終周までおこなった。資料では、最終週の「プレゼン資料に再現資料もつけておく。

資料

*4人の生徒の「プレゼン作品」の通時的羅列

ここで約150人の学年の生徒の内、4人を抽出し資料として並べる。

この4人は、次のような特徴が特に認められたと筆者が判断したため選び出した。

「あやか」、プレゼンをするまでの、1年生のとき、「まじめ」な印象であり、授業内での発言もそう多い方ではなかったと記憶している。プレゼンでは、「自分のアニメの好きな作品」「音楽の趣味」「絵の趣味」など、「自分の愛する世界」を積極的に伝えようとするのがよく目立ったので選んだ。「プレゼンが楽しかった」と卒業文集を始め、いくつかの場所で「あやか」自身が書いている(本編4-5-3参照)。

2人目「ひろき」。「ひろき」もまた、教室で、特に公的な発言の少ない生徒であった。いわゆる、「目立つ」とか「教室の雰囲気や方向付ける発言」をする生徒ではない。が、「プレゼン」で少しずつ気の利いた発表をし、それに対する聞き手の反応がよかったために、だんだんと工夫し、量的にも増やして語りを作っていた生徒である。

3人目「しき」は、授業態度にむらがあり、やるときはやるが、机に突っ伏したり、時には隙を見て本を授業中に読もうとする生徒であった(国語科では比較的授業に参加していたが)。

「プレゼン」も最初は10数秒くらいの短いプレゼンをめんどくさそうにやっていたが、だんだんと工夫し充実した「プレゼン」を作ることになった生徒である。

4人目「こうだい」は、「パラディグマ」の幅を広げようとした例で挙げた。与えたテーマからずいぶんとずれている場合もある。ただ、「人前で人の心を動かしたい(笑わせたい)」といった情熱は何えるので、ほとんど矯正していない。落ち着く時期が来れば落ち着く、という例であるかもしれない。最終周の作品紹介などは好きな作品を丁寧に紹介しようとした。

資料1 「あやか」プレゼン2年2周目～3年9周目

2年2周目 趣味。「ヘタリア」。イタリアの擬人化。日本好きだが、リトアニア、ラトビア、エストニアも好き。(1分33秒)

2年3周目 「ピアノ教室発表会。文化祭の一週間前。ソロの曲1曲。中高生9人が3人へ。先生の友達が入ってきて5人でやってる」(2分19秒)

2年4周目 はまる本。『生徒会の一存』北海道。北陽学園(齋藤の聞き間違いによるメモ。実際は「碧陽学園」)の生徒会室でだべったり。6巻と外伝2巻。(53秒)

(もえぎメモ:はまっている本。生徒会の一存。8冊出てる。全冊持っている。)

(ひさのりメモ:生徒会の一存。北海道。8巻。アニメ化。)

2年5周目 夜、家の中で聞こえてきた音。3週間前、小さな赤ちゃんの女の人の悲鳴。たまたま黒い車。気志團。大音量。ここ2～3日平和。

2年6周目 日曜日。河合音楽コンクール。2曲。「ミ・ア・ウ」猫をイメージ。ドボルザーク。連弾。ベース音。本番緊張。左手小さいのかな。賞とれてよかった。(1分22秒)

2年7周目 自分のいとこの経験。1年前、DSポケモン床にDSごと落とす。160時間セーブデータ消えた。おこった。3日くらいで中身もどった。

2年8周目 ワックス。荷物、机出した。ワックス塗り、ボランティア募集。是非行って。(53秒)

3年1周目「好きな〇〇」(1回目:自分で〇〇を埋めて、それについてプレゼンする)「好きなグランドピアノの機種」…「KAWAI」のピアノが好き。「RX-NEO-II」がいい。家にあるやつ。「YAMAHA」は響きがよくない。狭い部屋だと耳がくわんくわんする。BOSTEMと比べて。家にあるタイプは150万円くらい。同サイズでBOSTEMだと200万円くらい。弾いて違いがよく分からない。だからKAWAIのピアノなんです!RX-NEO-IIとは。RXシリーズで素材がこだわってあるNEO。の二つ目のサイズ。去年の10月に買ったばかりだから鍵盤はまだ重いけど。弾きこむとコンサートピアノみたいな弾き心地になるみたい。(伝える工夫。具体「RXシリーズを詳しく」似てる「コンサートピアノ」と対比「YAMAHAやBOSTEMと比べて」)

3年2周目「好きな〇〇」(2回目)「好きなCOPICの色」…コピックについてざっと説明。全部で399色(2009年10月現在)アルコール系マーカーについて。系統についての説明。好きなコピックの色について語りまくる。

(齋藤メモ:コピックの色。アルコール系マーカー。87トピック。新色344色。YG11。イエローグリ

ーン。

見事、持ってきてないので分かりませんが、平石さんの靴下の色) *「あやか」は「語る内容すべて書き込む」のではなく、「原稿メモ」の形で記録。

3年3周目「好きな〇〇」(3回目) 「COPICの色～part2!～」……前回の反省。好きな色。語って。語って。カラーレスブレンダー。実物見本。おまけ。ほかの画材と組み合わせ。部紙(齋藤注：美術部で作製した冊子。「部誌」が正確か)見せ。(伝える工夫 具体「いろいろ」と似てる「掲示物の色と」対比「他の画材と」)

*前回同様「あやか」は「語る内容すべて書き込む」のではなく、「原稿メモ」の形で記録。

3年4周目「〇〇といえば」(1回目) お盆。サマーウォーズ-Summer wars-。①お盆にみんなで見た。②内容神! ③ショタ万歳! ④声優が……。⑤二次創作。⑥時かけと似てる。⑦細田守。⑧原恵(あやか注：又は押井守) ⑨colorful ⑩ホショタ万歳。⑪佳主馬万歳。⑫←ショタ。⑬萌え萌えキューン。とウサギ!! 愛(齋藤注：と大きく書かれる)(伝える工夫 具体「内容」。似てる「ホショタ守(あやか注：時かけ)」対比「原恵- (あやか注：又は押井守)。みんなは「墓参りとか、夏コミ!」でくると思うかもしれないけど)

3年5周目「〇〇といえば」(2回目) 「動物といえば」たぶんキツネだと思われるぬいぐるみ。ジャッカルってどんな動物? キツネみたいな! お! わが家にぬいぐるみがあるぞ! 2歳のときにもらたーでかい。いとこはアライグマ。いとこは遙か昔に捨てたらしい。私は扱いがいい! 部屋に一角に鎮座しています。ここ5、6年でツルってピカっしてきた。当初はキツネよりクマに似。まだ使える! 何に使うの? がんばる! (2分13秒)(伝える工夫 似てる「くま ジャッカル」対比「いとこ」みんなは「ペットの犬とかカルペンとかでくると思うかもしれないけど」)

3年6周目「〇〇といえば(ことわざ編)」(1回目) 「聞くは一時の恥聞かぬは一生の恥」テーマ「百聞は一見にしかず」自分はあるまちがいを犯しました。プリントみりゃわかる。百聞は一見に如かず(あやか注：似)だ……だって似てるんだもん! というわけでコレで話す。(あやか注：解) 100回聞くより1回見たほうが分かる。漢の国(古代中国)のことわざ。(あやか注：具) 100回見るより1回やったほうがわかる。っていう続きもある。そんなmeの百聞は一見に如かずは。最近の尖閣諸島漁船衝突事件。←Youtubeに漏れたよね。あんまニュースみないからわかんない。新聞とかじゃわかりにくいからみてみた! 関連動画でJUMP! 13件目くらい? で。全然加工してない音付きの映像発見!! あー。こんなのか……。思ったよりショボイ……。END (4分45秒) (「伝える工夫」「解釈 聞いていたら少しの恥だが、知ったかぶりをしていたら、その恥は一生分になる」(似てる テーマとお題)「対比 ニコ動とYoutube」「みんなは自分の経験でくると思うかもしれないけど」)

3年7周目「〇〇といえば(ことわざ編)」(2回目) 「策士策に溺れる」テーマ「パッケージ内迷子」意味は、自分の力に頼りきって負けてしまうこと。小3くらいからずっと舞台やミュージカル作品が好きだった。毎年、DVDが比例みたいに増えていく。ギャー。他にもYoutubeでおとしたのをDVDにしたりしてまた増えるギャー。舞台とミュージカルの違い、分かる?? 舞台上でやる作品全体を舞台っていう。でも、もっと詳しく言うと、芝居だけの作品を舞台。芝居+歌+ダンスがミュージカル。舞台「～」とかミュージカル「～」とか書いてある。一年のときにした具体と抽象を使うと。一番上に舞台。その下にもうひとつ舞台。そしてミュージカル。で、今、DVDが家に30枚～40枚くらいある。DVDをデッキに入れ変えるマとき、どれかわからない。つつい、開いているパッケージに入れてしまう。そのくり返しで、気づいたときには。記憶という名の策に溺れ……。パッケージ内迷子のできあがり。ちゃんと買ってパッケージがあるやつは。救える。パソコンからおとしたのは。同じのがいっぱい。しかも名前がない。悲惨なことになる。人に貸すときとか、機会があると。がんばって整理する。いまだに正体不明のDVDが20枚近く……。いい加減整理したいです。(2分48秒)(伝える工夫 解釈「自分の力に頼って負けてしまうこと」たとえ・似てる「比例みたい。」対比「舞台とミュージカル」その他「具体と抽象」みんなは「性格上、辞書の箱の中にマンガが入っていて肝心の辞書が行方不明」でくると思うかもしれないけど)

3年8周目「〇〇が△△する、なる物語」紹介(1回目) 作品「毒吐姫と星の石」。出会い マ書店で、本を見ているときに、変わった題名だな、と思って手に取ってみた。そしたら、電撃文庫等、ライトノベルには珍しい表紙。ライトノベルだと、デジタルの美少女×美少年が主流だけど、手書きのミステリアスな絵に惹かれて、早速購入。したんだけど。よく見たら、電撃文庫大賞を取った作品のしかも”続編”って書いてある!! 自分は人が評価したものがすごく嫌い今まで、そういう本を読んだことがなかった。しかも続編。よりによって、続編。まさかの続編。あーあって思った。一瞬で後悔した。でも買っちゃったモノだし、自分の読書運なんて所詮こんなモンだろ……と思って読みました。1日で読みました。ムチャクチャ感動しました。今まで本読んでここまで感動したことはない!! それくらい感動した!!! ストーリーを簡単に言うと、「国を呪った姫が、同盟国に嫁いで、呪われた王子と恋に落ちる物語」っていうテーマ自体はすごくありふれている。でも、独特の世界観を持って読んでるうちに引き込まれる。著者の紅玉いづきさんの本はどれも交錯する2つのストーリーが特徴的。だから、1回目に読んでちょっと謎だったところも、2回3回と読み込むと隠された伏線とかがあったりして、ミステリー小説みたいなどころがある。すてきwww。他の小説と違って、続編でも、全く違う一つの物語として、独立していて、どれも、強くて脆い女の子が主役になっている。(伝える工夫 たとえ・似てる「ミステリー小説みたい」)(5分37秒)

3年9周目「〇〇が△△する、なる物語」紹介(2回目) 作品「薄桜鬼」。これは乙女ゲームっていう正式名称が女性向け恋愛ADVというジャンルのゲームで、このジャンルとしては異例のシリーズ15万本を出荷しました。……まあ、イナズマイレブンは300万本以上だけだね……。このゲームは、主人公の雪村千鶴が京の町で出会った新撰組の隊士たちと絆を深めていく物語です。◆最初千鶴は新撰組が探している人物の娘ということで保護されたんですが、千鶴も父を探そうちに、鬼の一族や羅刹という新撰組の秘密を知ることになります。鬼の一族とは、刀とかで斬られても、すぐに傷が治ってしまう不思議な一族で、羅刹というのは、鬼の血を薄めた、トマトジュースみたいな液体を飲むと成る生き物で、鬼と同様の力を得ますが、元々人間なので、吸血衝動で狂ってしまったり、寿命が縮んだり、色々と不便です。◆さて、新撰組の沖田総司。史実では結核で死んでしまうことで有名ですが、この作品でも結核になります。しかし、近藤さんの役に立ちたい一心で羅刹になります。その後、新撰組と決別した沖田さんと千鶴は、羅刹の力を消すために、千鶴の父を探すのですが、千鶴も、生き別れの兄によって、羅刹にされてしまいます。生きることを諦めかけた千鶴に沖田さんは、「前に進むことを諦めるのなら、僕が君を殺してあげるよ」と言い、その一言で千鶴は、何があっても2人で生きると決めます。そして2人は、命をかけて、最後の戦いに挑みます。◆……というのが沖田さんルート。◆まあ、この作品は他と比べてBADENDになる確率がすごく高く、後略は難しいけど、その分、ENDに辿りつときは、仮面ライダー電王の最終回と同じくらい泣けます。◆今月は、DSへの移植版が発売されるんで、安くなった頃に買おうかなー……と思っています。(4分49秒)(出典等 PS2ゲーム「薄桜鬼」「薄桜鬼随想録」「薄桜鬼黎明録」PSPゲーム「薄桜鬼遊戯録」PS3ゲーム「薄桜鬼随想録」)(伝える工夫 たとえ・似

てる「トマトジュース」対比「イナズマイレブン、他の乙女ゲーム」)

資料2「ひろき」プレゼン2年2周目～3年9周目

- 2年2周目** 2週間、ウインブルドンみて、4時にねる生活。ナダル出ず。どうせフェデラーだろうと思った。(44秒)
- 2年3周目** 小学校のともだちにあった。自転車で古い神社(絵を描く：齋藤注)を4、5人で通ろうとした。最初の砂利で3人進められず。次の石段下って、駐車場。車にぶつかりそうになった(2分35秒)
- 2年4周目** 先週、インフルの疑いで一日休んだ。小学校の時、インフル、幼稚園から6年間連続でかかった。6年生の時かからず、昨年はかからなかった。(48秒)
- 2年5周目** 土曜。インドア大会。延長。体育館。ボールの跳ね方違う。体育館の床とボール同じ色。
- 2年6周目** 初夢。今年見た。勉強に集中していたら机のわきにゲーム。やろかな。(48秒)
- 2年7周目** 先週、部活。大学コート、オムニ化でしばらくできない。(32秒)
- 2年8周目** のど痛く、声は出るが、枯れた声。熱は無いが、8時に起きてびっくり。電話がかかり、「いりません」が出なくて、1分続いて、すいませんでした(1分25秒)
- 3年1周目「好きな〇〇」(1回目：自分で〇〇を埋めて、それについてプレゼンする)** (プレゼン記録用紙を提出せず。齋藤メモによる再現) 準備してなくて緊張。好きなとき。金の帰った瞬間。月火水木は次が学校。金は次が休み。会社の給料とボーナス。1, 2, 3, 4, 5, 6でボーナス。似ている。板書で説明。
- 3年2周目「好きな〇〇」(2回目)** 「好きなこと」……今日は、好きなことについて、話したいと思います。僕はスポーツの試合を見るのが好きです。それも日本チームを応援するというよりは、トップレベルの戦いが好きです。野球のペナントより日本シリーズ。それと、種目はあんまり関係ないです。とにかく、白熱した試合を見るのが好きです。それで、去年2Aの人は覚えていてる人がいるかもしれませんが、この時期はウインブルドンをやっています。ウインブルドンというのは、イギリスで行われているテニスの試合の名前です。それで、去年は3時寝の日が続いているといいましたが、今年は、サッカーのW杯のかいさいにともなって、まあ日本は惜しくも負けてしまいました。23:00～サッカー。0:00～5:00までウインブルドンというスポーツ観戦好きにはくつうの一週間になっています。サッカー、テニスともに目がはなせません。これから、サッカー、テニスともに、ハイレベルな戦いになるので、今年もねれそうにありません。(齋藤注：今回も黒板を使い、時間の使い方を説明)
- 3年3周目「好きな〇〇」(3回目)** (プレゼン記録用紙を提出せず。齋藤メモによる再現) 夏休み、あつい。アイス。ガリガリ君、平のサラリーマン。アイスボックス、ちょっと上司。MOW、専務。爽、部長。ハーゲンダッツ、社長。(5分54秒)
- 3年4周目「〇〇といえば」(1回目)** お盆ということで、話すネタを考えたのですが、お盆の墓参り、帰省は、残念なことに、田舎が鳥取ではほぼないことではないかと思えます。僕も、親の実家は自転車で20分以内。お盆は夏休みの日です。で、今日は昼食(ひろき注：図)を紹介したいと思えます。夏休みのご飯は手抜きになることが多いのですが、お盆はさらにひどくて、お中元の焼き豚、そうめん、チャーハン、ソウメン、カレーのローテーションです。しかも、今年は暑くて、例年に比べて、具も少なかったです。朝食は、ごはんとりんごとたまご。
- 3年5周目「〇〇といえば」(2回目)** 集中できる場所・時は、音楽きながらとか、神の前(齋藤注：友人のプレゼン「母親は神的存在」という内容をうけて)等、人によっていろいろあると思いますが、僕は性格的に集中とかどうでもいい、やりたいときにやればいいじゃんという性格だったんですけど、あの1年が僕を180度かえました。その1年の一部をお話します。その当時、J小学校には、生徒におそれられている先生が一人いました。もちろん、池本家の神のことではなく(齋藤注：J小学校は、先の友人の母も勤務している)、それ以上にこわい存在です。なので、始業式のたんになん発表の時、絶対来るなどみんながおがんでいたのに、きてしまった……。僕が一番かなしかったのは、ちこくした人はちこくの理由文を前で読まされるんですよね、はずかしい……。 (5分10秒)
(齋藤注：「ひろき」はメモ原稿からアドリブで足していくタイプ。「みんなで拝んだ」は、「みんなで『安全祈願』のお守りを持ち、神社にお願いに行った」といった内容になっていたし、「ちこくの理由を読まされる」は「遅刻して前で読まされるのが嫌で、大好きなウインブルドンの決勝を見ないで寝た」と恐怖の具体例として、原稿にはないが発表していた)
- 3年6周目「〇〇といえば(ことわざ編)」(1回目)** 「石橋を叩いて渡る」といえば。前回、まあ、Mr.T秘話をしゃべっちゃって、後にひけなくなったので、なるようになれということで今回は、プレゼンしたいと思います。小学校アピール。6-2-1(齋藤注：意味不明。6年2組1番?)。小学校の時は、中間休けいがありましたよ。10:20から10:40。僕達はサッカーとかやってたんですけど、たしか、あの日は夏休み明けの9月ぼう日。いつも通り、サッカーしてて、Mr.Tは時間に少し厳しかったので、いつも36分にきりあげて終わってて、この日も外の時計が36分になり、教室にもどるとそこは授業中。しかも、45分だったんです。時計をみたとき、僕たちの休けいをまんきつしたあとの笑顔はこおりました。外の時計が4分おくれしていたんです。もちろん、前にたたされ、僕たちは7人だったはずで、授業をストップさせて、クラスにめいわくかけるんだから謝罪しろといわれて、1人目がしゃべりおえたあと、僕はぶなんに2番目にしゃべろうと重い、ぼくは……といいたそうとしたら、同じことを考えてたやつがいて、声がかさなり、僕たちはフフと小さく笑ってしまいました。その瞬間後ろで、いっぱいになったごみぶくろをしばっていた、Mr.Tがたちあがり、僕達に厳しい視マを見せたかと思えば、その瞬間、いっぱいになった、ごみぶくろを僕達にやけてきたんです……。その先生、昔、市のいっばんの大会で、やり投げで優勝けいけんをもつ先生で、僕の前の子にHITし、Mr.Tの名言「謝るときはしんけんに謝まれ！」といって、ようやく授業が始まりました。その後、外の時計もなおったんですが、6-2の男子の約半数くらいは自分の時計をもってきて、特に、そうじ、休けいの時は、時計をよく見て行動するようになりました。いくら外の時計がなおったとはいえ、自分の時計も見る。まさに石ばしをたたいてわたるでしょう。(齋藤注：欄外のメモ書きに「じつえんもいけるかも」とある)(6分00秒)
(齋藤注：ここで「ひろき」の作品は発表前のメモである。資料編3に載せている「ひでゆき」による再現と比較すると、「ひろき」はメモではゴミ袋は一度しか投げられていないように書いていたが、「ひでゆき」の再現では2回になっている。筆者も、「ひろき」は発表時には「2回投げた」と発表したように記憶している。さらに「ひでゆき」再現には、メモにない、「担任の先生のにげなく授業をはじめてしまう」描写もあった。アドリブ的に詳細を語ったことを残している。「ひでゆき」のメモももちろん聞いていることを正確に書き起こしているのではない。メモをもとに、ふくらませて再現している。筆者の記憶によればゴミ袋を二回投げるきっかけが違うような気がしている。このように、音声による、「生もの」の「プレゼン」それ自体を記録することは難しい。)
- 3年7周目「〇〇といえば(ことわざ編)」(2回目)** 「雨降って地固まる」テーマ「Mr.Tと6年2組」こわいけど、

バレでも会うことないから大丈夫。しばた。同窓会。学級通信みせる。こわくなって、友達にメール。電話でかかってくる。タバコでそのうち中になってなかった。絶対にくるといわれて。本当に心臓がドクドクンいっててこわい。授業のペース早いママ。時間に厳しい。ブーイングとプラン。イベントの内容。時間で話すか決定。(1分50秒)

(齋藤注：完全な簡略簡条書きメモ。「イベントの内容」「時間で決定」など。プレゼンにかかった時間次第というメモも)

3年8周目「OOが△△する,なる物語」紹介(1回目) 作品「僕たちとちゅうざいさんの700日戦争」悪ガキ集団とその町のちゅうざいさんとのいたずらか、たましいをえがいた本です。この話は、今は映画や本になりましたが、もともとは、ネット小説で、作者のかこの半分フィクション、半分ノンフィクションです。この話に出会ったのは、小6の時で、友達にすすめられて読み始めました。いたずらの部分だけ読んでも充分おもしろいのですが、僕たちは、いたずらのあとに、悪ガキ達が、ちゅうざいさんに社会的立場の権力で絶体絶命のときにいういい分けが大好きでした。何回も読むうちに、これは僕たちのじつ生活に生かせるという案がでてきて、これを参考にして、先生に少しでもひとあわふさせようということになり、考えたげっか、本作に車のスピードいはんをとりしまるきかきを、自転車に金管楽器をかついでぼうそうし、あざむくという、金管楽器さくせんを参考にして(齋藤注：ここでメモ終わっている)(4分38秒)

3年9周目「OOが△△する,なる物語」紹介(2回目) 作品「ウインブルドンヒストリー2012」かこけいで予想(齋藤注：これしかプレゼン記録用紙には書いていないので、あとは齋藤のメモより再現)。2012年のウインブルドンを見たかのように予想。見てください、って言うてもみないので、説明。「ウインブルドン」1995～2001まで、「サンブラス」無敵。引退。戦国時代。フェデラ(スイス)、～2007、連覇。2008、6時間のゲームでナダル(スペイン)が破る。冬にヒザを壊し、2009フェデラ。2011、フェデラ、全米オープン8位。ナダル、2011、3メジャー制覇。(3分49秒)(齋藤注：確認しないまま「ひろき」は卒業していったが、この「ウインブルドンヒストリー2012」がテレビ番組なのか、本なのか、あるいは、「ひろき」の予想が言いたただけなのか、不明。齋藤は、当時、そういう番組があると理解していた)(しおりメモ：「ウインブルドンヒストリー2012」「コメンテーターが予測した」「M観たかのように」「Gサンブラス、フェデラー、ナダル」「自分は三つ巴を予想」「黒板のおかげで分かりやすかった」)齋藤注：2年時はテニスの話題など、わりとあっさりとしてプレゼンしていた「ひろき」であったように記憶しているが、3年で、特に「T先生」の話題を取り上げてから、工夫もあり、ボリュームもあるプレゼンがなされるようになった。例えば、6周目では、「怒られているとき、笑うのをこらえるつらさ」の描写や「夏休み明けでゴミ袋がふたつあった」とメモにないアドリブでその後、T先生が投げることへの伏線、あるいは「謝るときは真剣に謝れ！」と叱った等の本人がゴミ袋をあてたことを謝らず授業に入る姿など、「仕掛け」と思える構造がいくつも見られる。「ひろき」のこのプレゼンに対し、級友「ゆう」はメモに「完成度高い」とも記していた。プレゼンの繰り返しにより、自信も技術も身につけていったのだろう。

資料3 「しき」プレゼン2年2周目～3年9周目

2年2周目 部活で県大会出場。拾うの好き。トスは矢谷。(27秒)

2年3周目 「最近の事故。お父さん、バイクで。母は手に」(20秒)

2年4周目 マジック。文化ホール。3月に向けて。がんばっている。(16秒)

(まゆこメモ：マジック。今度。ホールで公演。来てね)

2年2年5周目 2日。氷太くんがバレー合宿。体力無くなる。改めたい。(22秒)

2年6周目 正月。予定を書いたら、バレーと手品発表かぶりそう。自主トレ。(20秒)

2年7周目 マジック。最後。オプション。大がかりのしかけ。迷っている。バレーと両立。(26秒)

2年8周目 今週、日。文化ホールで、手品。(14秒)

3年1周目「好きなOO」(1回目：自分でOOを埋めて、それについてプレゼンする) (プレゼン記録用紙が提出されていない)

(齋藤メモ：ゲーム。X-ボックス。?プロジェクト。主人公よりゾンビの足が速く、クリアできない。ユーチューブでアメリカ人がやあって、うまかった)

3年2周目「好きなOO」(2回目) (プレゼン用紙が提出されていない)

3周目「好きなOO」(3回目) (プレゼン記録用紙を提出せず。齋藤メモによる再現) バレーボールチーム。堺プレイヤーズ。パナソニックに比べ、ボールを集める。(24秒)

3年4周目「OOといえば」(1回目) 買い物。本。あまり行かない。行ったときは1冊買って帰ることが多い。人、売れている本を買う。この前、「ジョーカーゲーム」「ダブル・ジョーカー」もう一度読み返す。(29秒)

3年5周目「OOといえば」(2回目) 「ファーストフードといえば」皆さんの中には、よくファーストフード店へ行く人も多いと思います。◆その中の”マクドナルドマグド”の裏面について僕は話そうと思います。マクドナルドはボリュームがあり、値段も手ごろでメニューも多いので人気がある店ですよね。たくさんの種類のセットやハンバーガー、ジュースなどがあります。その中の一つに”ハッピーセット”というものがあります。このハッピーセットはぜんぜんハッピーじゃないということを知っていますか。”ハッピーセット”はハンバーガー、ポテト、ジュースとさらにおもちゃがついているセットです。このセットは子どもを対象としたもので、おもちゃ(齋藤注：「その」を消した後に「おもちゃ」と書かれている)種類の多さを利用して、子どもに「セットすべてをそろえたい」という考えを起こさせるものです。”ハッピーセット”は人気があり、たまに「このおもちゃは完売しました」と書いてある紙をマクドナルドで見かけるほどです。価格が安いことも人気に大きく関係しているでしょう。ではなぜこんなに価格が安いのでしょうか。◆それは労働力が豊富で賃金の安い中国の工場がハッピーセットのおもちゃが作られているからです。中国(齋藤注：「その」を消し「中国」と書いている)工場に働いている人たちは1日に17時間も働かせるのに時給は20セント(約25円)足らずです。(齋藤注：「労働時間はアメリカの2倍以上。時給はアメリカの最低の1/300。」と書いていたのを消している)こんなに働いても1日で325円にしかなりません。その労働者の中には14歳の子供もいましたこの事が発覚してから子供の労働はなくなりましたが、他の労働者の労働時間と給料は改善されていません。改善するとハッピーセットの価格が高くなり、売れなくなるからです。◆皆さんがなんの気なしに食べているマクドナルドのハンバーガーにはこんな裏面がまだたくさんあります。皆さんがこれからハンバーガーを食べる時にはぜひこの事を思い出して考えてみてほしいと思います。ハッピーセットのぜんぜんハッピーじゃない話でした。(齋藤注：最後の「ハッピーセットのぜんぜんハッピーじゃない話」は「このハッピーセットのことを知っている人は少ないのではないのでしょうか」という部分を消して、その上に書き込んである)(1分26秒)

(齋藤注：提出用のプレゼン記録用紙以外に、構想のメモも提出されていたので紹介する)

・最大の客は子どもである

→おもちゃ(ハッピーセット)

- ・種類を多くすることでセットを完前ママにそろえるまで何度も店にいきたくなる。

↓
親にねだる
→・共働きの親がいっしょに過ごす時間の埋め合わせに
安さのわけ
・低賃金で十六時間(十七時間以上)の労働←改善されて
二〇セント(25円)足らず
・子供の労働 物価の安い中国
十四歳の労働者も↑ ↓改善
・現在は子どもが働くことのないようにしている。
ハッピーなのは買う方だけで作る方はちがう。

おいしいハンバーガーのこわい話
著者 エリック・シューローサー
チャールズ・ウィルソン
訳者 宇丹貴代実
発行者 木谷東男
発行所 株式会社 草思社
2007年5月1日

3年6周目「OOといえ(ことわざ編)」(1回目) 「仏の顔も三度」(齋藤注:プレゼン記録用紙未提出。齋藤メモより再現。発表者であることを忘れていた様子) どんなやさしい人手も、悪いことをしたら怒る。2回くらいでやめておこう。(20秒)

3年7周目「OOといえ(ことわざ編)」(2回目) 「漁夫の利」テーマ「バレー,中央中」。弱い 去年 今年 →くじが強い インフルエンザ。(40秒) (伝える工夫 解釈「いいとこ取り」具体「〇」たとえ・似てる「〇」対比「〇」その他「?」みんなは「?」でくると思うかもしれないけど)

3年8周目「OOが△△する,なる物語」紹介(1回目) 作品「永遠の0」僕は百田尚樹さんの書いた『永遠の0』という本について話そうと思います。この話は「健太郎」という主人公が、第二次世界大戦中に零戦の小隊長だった宮部少尉について書くという体裁をとっています。「健太郎」は宮部少尉に興味を持ちます。なぜなら、宮部少尉が矛盾する二つの面を持っていると思ったからです。◆一つめは、宮部少尉が自分の命を大切にしている面です。もう一つは、最後に宮部少尉が特攻隊に志願したという縁です。つまり、自分の命を大切にするといいながら、生還する可能性のない特攻隊に志願して死んでいったのです。◆一つめの自分の命を大切にするという点について少し話をすると、宮部少尉は戦闘中、自分の機だけ離れたところにおいて厳重に警戒をしていました。そんな彼のことを周囲の兵隊たちは臆病者と見ていて、実際に本人にそう言う人もいました。宮部少尉は既婚者で、残してきた妻に「娘に会うまでは死なない」と約束していたのです。しかし彼の戦闘中の行動は自分の身を守る為だけのものではないことも、だんだん分かってきます。◆主人公の健太郎が感じた謎については、全部読み終わった時、宮部少尉の深い愛情から生まれた行為であると言っておきましょう。◆僕がこの本を読んで感じたことは他にもあります。それは、日本の軍隊は兵隊を大切にしないということです。このことに僕はたいへん驚きました。戦争の作戦は参謀本部が立てます。その参謀本部が前線の兵隊の命を使い捨てにしている様子が、この本の中ではたくさん出てきます。ここでは、その中でもガダルカナルの陸軍の話をしていきたいと思います。◆ガダルカナルには米軍の基地がありました。その防御が手薄なうちに叩いておきたいというのが司令部の考えでした。司令部はろくに基地の偵察もしないまま、「米軍の兵力はだいたい二千人くらいだろう、その二千人には日本兵九百人で間に合うだろう、なぜなら日本は神国であり、負けるはずがないのだから」という何とも信じられないおろかな分析と作戦をたてるのです。しかし、実際には米軍の兵力は一万三千人もいました。武器も兵糧もわずかしか渡されていない、たった九百人の日本兵で勝てるはずがありません。日本兵の戦い方は悲惨なものでした。肉弾攻撃といって、銃剣を掲げてつっこんでいくだけです。それを一万三千人の米軍が機関銃や重砲、迫撃砲といった圧倒的な火力で迎え撃ちます。勝負はやる前から明らかで、ガダルカナルの陸軍は一夜で全滅しました。あわてた司令部は兵力を五千人に増やしてガダルカナルへ送り込みますが、事情は同じでした。◆もう一つ、ガダルカナルの戦いで最も驚くべきことがあります。日本の兵隊の戦死者のうち、4分の3は餓死だったということです。司令部は食料の配給を一切しなかったのです。これではガダルカナルの日本兵は、米軍にやられたのか日本軍にやられたのか分からないと思います。武器を手に戦うのが兵隊であるのに、戦死ではなく飢えて死んでゆく無念を考えると僕は胸が痛みます。◆この本を読んで考えさせられることは他にもあるのでみてください。(2分40秒) (伝える工夫 具体「ガダルカナル」たとえ・似てる「たぶんある」対比「たぶんある」その他「たぶんある」)

3年9周目「OOが△△する,なる物語」紹介(2回目) 作品「ジョーカー・ゲーム」。スパイは母国の為に行動する。例えば、KGPはソ連の為に。しかし、第二次世界大戦中のスパイ養成所にいる結城中佐が説くスパイ活動は母国への忠誠心を遥かに凌駕して成立する。「スパイ活動も、人の死さえもすべては虚構だ。スパイ活動を全うする為には自分を第一に考えなければならない。しかし、国はそれを認めない。この矛盾を抱えたスパイはいつまで自我を保ち続けられるのか。◆この小説はよく「アクションがいい」と言われる。しかし、その中に人間への深い洞察もうかがえる。「イワシの頭」のくだりではニーチェの「超人」を想起させる。結城中佐は「諸君の任務を助けてくれるのは外から与えられた虚構ではありえない。それはその場その場で自分の頭で考えることだけだ。」現代に置き換えてみれば、人の言葉「アイツはウザイ」で何も考えずその人を評価したり、「〇〇会社員」とか「〇〇大学卒」とか外から与えられた虚構に安住し、自分の頭で考えるのをやめたとき、人はあほうになる。このくだりも個人的に好きなのでぜひ読んでほしい。(1分35秒) (伝える工夫 具体「〇」たとえ・似てる「〇」対比「〇」その他「〇 アドリブ」)
(まゆこメモ:「ジョーカー・ゲーム」「スパイたちの矛盾と戦う様子をえがく物語」「スパイ」「国からの虚構の忠誠心を教養」「g・t・m」)

資料4「こうだい」プレゼン

- 2年2周目** 好きなマンガ「エリア」。アニメ「ケロロ」。よく観るテレビ「ガキ」。愛称「ダリ」は植木がつけた。ポルトガルも好き。(1分04秒)
- 2年3周目** 小3からガイナールのボールボーイ。こんどJリーグになったら、僕にも。(38秒)
- 2年4周目** インフルエンザにかかった。土曜日でなかった。こんど山口へいく。(29秒)
(もえぎメモ:インフルエンザ。でられなかった。山口)
(ひろこTメモ:新型インフル。車中泊。山口。楽しみ)
- 2年5周目** ガイナール。試合のホームゲーム。今年も見てきたんですけど、今年も5位。来年もがんばってほしい。(45秒)

2年6周目 好きな匂いガソリンの匂い。「いちごの匂い」とかじゃなくて、「ガソリンの匂い」の消しゴム作ればいいのに。(28秒)

2年7周目 安部と温泉。入ったら変な人いて、安部に話しかけ。その人先にあがって、ぼくらもあがった。安部のパンツがなくなって、ぜったいあの人のはいていた。(51秒) (齋藤注：テレビ番組「〇〇な話」の中での話の完全なバクリ。「自分のこと(実話)」でプレゼンを構成する、という場へフィクションを持ち込む、という「異化」を行った)。

2年8周目 高速つかって奈良へ安倍くんと行った。パーキングエリア。「トイレいっといれ」。奈良の人にならって、鹿を叱った。ポテトがぼてっと落ちた。みかんがみっかんない。からあげ、あとからあげる。(58秒)

3年1周目「好きな〇〇」(1回目：自分で〇〇を埋めて、それについてプレゼンする) 「テーマはゆうじ」……「1995年〇月〇日。身長161cm体重46kg趣味、もえちん。ぶかつ。好きなところはドラキュラのようなやえばです。3年間クラスが同じです。1年の時はへんなスカウターをはめていました。入学式であったときにのりうつられました。まあ、悟空にたおされましたけど。2年になってコンタクトにして、はんにゃの金田じゃないほうににってきました。仲良くなった理由。もえちんワンダフルランランルンゲームをやったこと」

3年2周目「好きな〇〇」(2回目) 「好きなアーティスト」……西野カナ。
(齋藤注：あとはプリントにイラストが描いてある。齋藤記憶：「西野カナが好き」と言って、なんか顔を作っていたような)

3年3周目「好きな〇〇」(3回目)

ダ「ウイーン」

ユ「自動ドアせんでえーちゅうに」

ダ「僕の好きな……(後ろを向いている)」

ユ「どこむいてんねん！」

ダ「ぼくの好きな人は〇〇ゆうじくんです。ぼくの好きな人は〇〇ゆうじくんです。」

ユ「なんで2回ゆうねん」

ダ「まあまあおこるなって。バナナ食べる？」

ユ「ふつうの顔や。誰がゴリラやねん」

ダ「動物園帰ろうか？」

ユ「ってだれがゴリラやねん」

ダ「しりとりしよう。リンゴ」

ユ「ゴリラって、こらー！」

ダ「新種のゴリラみつけたよ」

ユ「なんだって」

ダ「ちずゴリラ」

ユ「ふーん、ってこらー」

ダ「夏休みに渡米したんですよ」

ユ「まじで？で、どこいったん？ニューヨーク？」

ダ「えっとジャスコとかサティー行った」

ユ「それ、米子やん。なにかっこよくいってんねん」

ダ「それからテレビの泉行ったんですよ」

ユ「え、ホンマ？やっぱり人がいっぱいおった？」

ダ「花火大会やってたからな」

ユ「それ、とうごうこや。もうええわ」

ダ「どうもありがとうございました」

(齋藤注：「ダ」は「こうだい」の愛称「ダリ」より。本人も愛用。「ゆ」は「ゆうじ」。文中「〇〇」は実際には「ゆうじ」の名字)

***とうごうゆうじも巻き込んで「漫才」形式のプレゼン。「好きな〇〇」にもほとんどなっていない。**

3年4周目「〇〇といえば」(1回目)

ユ「ウイーン」

ダ「何の音だよ」

ユ「自動ドアだよ」

ダ「ウイーンがっしょうだんっていうかのうせいもあるだろ」

ユ「あるわけないだろう。なんでコンビニにウイーンがっしょうだんがいるんだよ。それより金だせや」

ダ「キャー！」

ユ「今何円あるんだ？」

ダ「100万ドルあります」

ユ「おうべいか。はらへったなあー。なんかくいもんねえか」

ダ「チェリーパイ」

ユ「おうべいか。まじふざけんなよ。ぶっ殺すぞ」

ダ「アイムソーリー」

ユ「おうべいか。打つぞっ！」

ダ「こんなところで死んでたまるか。家には息子がまってるんだ。じゅんぺいが」

ユ「なにが！」

ダ「バナナあげるから帰ってください」

ユ「だれがゴリラやねん」

ダ「……もしもしごうとうです……」

ユ「何つうほうしてんねん」

ダ「あ、けいさつじゃなくてどうぶつえんですよ」

(齋藤注：資料12同様、漫才形式の原稿メモ。)(1分6秒)

(ひろこTメモ：買い物。自動ドア。100万ドル。チェリーパイ。I'm sorry。欧米か。動物園)

3年5周目「〇〇といえば」(2回目) (齋藤注：プレゼン記録用紙未提出。齋藤メモより再現)「食べ物といえば」もえちん。ちよっとバナナ食べて。誰がゴリラやねん。Mステ。ヤングマガジン。あっちゃんいっしょだね。(齋藤注：コントだったように記憶するが、このメモではよくわからない)

(ひろこTメモ：テーマ「もえちん」。「ゴリラ」「バナナ」「AKB」「チャイナドレス」「かさぶた」「コント」)

3年6周目「〇〇といえば(ことわざ編)」(1回目) (齋藤注：プレゼン記録用紙未提出。齋藤メモより再現)「三つ子

の魂百まで」小さいときの習慣。大きくなっても直らない。「噛むこと」給食のストローを噛んでしまう。ギザギザ、プラスチックの部分か、なんか好きで、噛むことでストレス解消。イヤされる。岸本君のほっぺ。
(1分56秒)

3年7周目「〇〇といえば(ことわざ編)」(2回目) (齋藤注:プレゼン記録用紙未提出。齋藤メモより再現) テーマ「三人寄れば文殊の知恵」3人寄ればすごいこと。ガイナレ。松田監督。服部。岡野。服部, 技術。岡野, 精神。松田監督, 練習メニュー。3人のおかげで, J2へ昇格。(56秒)

3年8周目「〇〇が△△する, なる物語」紹介(1回目) 作品名「エリアの騎士」。(齋藤注:プレゼン記録用紙未提出。齋藤メモより再現) かけるが成長する物語。兄, サッカーうまい。世代別のエース。チャリ乗ってる時, トラック来て, 二人意識不明。兄, 脳死。弟, 兄の心臓で助かる。試合中, たまに兄が乗り移る。(1分23秒)。

3年9周目「〇〇が△△する, なる物語」紹介(2回目) 作品名「ダレンシャン」。(齋藤注:プレゼン記録用紙未提出。齋藤メモより再現) ダレンシャンがバンパイアになっていく物語。友達と危ないサーカスにいて, 友達はバンパイアになりたくて, 危ないサーカスの人, バンパイアとわかって, 「オレもしてくれ」。でも, 友達はわるい血が流れていて, なれない。「殺すぞ」。だけど, ダレンシャンが友を助けるが, 血を流されてなった。最初バンパイアと人間の間。バンパイアの国みたいなので修行して, もうひとつ別の族(人の血を飲み干し殺す)がいて, バンパイアとその族の対決。友達, バンパイアになりたくて, そっちになっちゃって, 戦争になって, 2人が戦って, 死んで, たぶん両方死んで, おわりました。それで龍の時代に。(5分11秒)

資料5 平成21年度2年A組 クラスのメンバーは同じテーマのもと, 何を選んだか。共時的羅列。

2周目

理科好き・英語嫌い。果物好き。野球NYヤンキース・阪神好き。ウインブルドン観戦生活。将棋・ハリーポッター・寿司好き。乙女座A型家族構成。ヘタリア好き。大丸地下好き。兄弟3人末っ子。テレビと勉強。母の勤務。漫画・テレビ好き。習い事エレクトーンにサクセス, 習字。好きなアイス。父母紹介。リレーのバトン渡し。無駄に筋肉痛。水泳得意。ゲーム『サドンアタック』。ゲーム開放倉庫ドラクエ2980円。とげ刺さりやすい体質。チョコ嫌い・球技好き。運動会全員リレー(19秒)。喉痛い, 風邪。吹奏楽部, 読書好き。嵐とエグザイル。写真好き。好きな果物。カレー, サッカー好き。小学卓球中学吹奏。高校生クイズ出るのが夢。テニス続ける。姉の応援。オーケストラの先生。バスケさぼった感じ。剣道水泳スキー。教室から玄関の距離。サッカー部へ転部。

3周目

小学校での卓球の自分史。卓球でラバー替えました。誕生日のプレゼントを開放倉庫に求める。自分の家の間取り(9分16秒)。なぎなたを文化祭オーディションに。ピアノ伴奏緊張。妹の幼稚園運動会。新人戦ベスト4で負けた。昨日の夕ご飯おでん, でも練り物嫌い。新人戦団体優勝, カラーメートブーム。読んでいる本ブラックホールについて。音楽教室発表会。父公務員鳩山公務員給料減らす。水泳50mの記録。近所の公園の蛍。アニメとゲーム好き, シナリオ大事。自転車盗まれた。自分の髪は自分で切る。読んでいる本『エンドゲーム』『タンポポ草子』。先週の高校生とのサッカーの試合。先週追突でもシートベルト100m前で走っている奇跡。剣道部連絡あやふや部室掃除。英語暗唱『あしながおじさん』。ピアノ来月発表会。部活先輩パートナーと。女子サッカー中国大会。トルコに母姉と行ききました。日曜日ジャスコでゲーム食事。ゲーム『左脳アタック』なかなか勝てず。西中と練習試合。寝ることが好き, 10時間くらい。最近むなしいi-pod。明日陸上ジャベリックスロー。小学校で韓国の学校と交流。小学3年からガイナレの試合のボールボーイ。

4周目

うさぎ。朝読書。バレエののぞき。スポレク祭で射撃。メダカ。家族。剣道竹刀の種類。太鼓の達人(実演込み)。書道。剣道(16分01秒)。習い事。自転車事故。夜の叫び声。インフルエンザで大会に出られず。今読んでいる本『モモ』。学校閉鎖のお菓子作り。自分の部屋は2畳。安藤くん家で遊んだ。陸上ジャベリックスロー。テニスの心得。ピアノ発表会。ラジオ深夜。はまっている漫画『あひるの空』。おそばの多み。塾帰りびっくり。インフルエンザ6年連続。滑り台から落ちた。はまっている本『生徒会の一存』。はまっている本『とある魔術師』。おじいさんの話。とっておきのプリンにカビ。東京で米井くん。冬の恐怖。落語ラジオ。打率2割。時計のバンド。TSUTAYAレンタル。

5周目

新型インフル病院で四時間待ち。国語のプレゼンのくじ運。野球小3から続ける。昨日の買い物パソコン。父単身赴任。新型インフル予防マスク。おばあちゃん風邪引かない。サンタに妹と手紙。友達と『ウニング11』。部屋の寒さ。顔が痛い, おたふく?第二次大戦の戦艦。竹刀の構造と剣道の稽古(19分39秒)。小学校の時こけた。テニスインドア大会。学研教室やめた。ガイナレがんばって。帰ったら寝る。書道書き初め。数学苦手。『未来創造堂』のこだわり好き。浜坂, 除草迷惑。書道7年目。『ロメス』最終回。男だけお菓子作り。アンサンブルコンサート。パソコンのメモリー。名前の読み方。テニス部へ転部。日当たり悪い家。文化祭中止でイントネーション忘れる。夜間こえる声。土日の料理。わが家の太り猫。バドミントン打吹杯。母と姉の誕生日忘れる。合唱『空も飛べるはず』好き。プラス思考へ。

6周目

家庭科リンゴの皮むき。Vリーグ見にいった。東野圭吾の新しい本買った。おじいちゃん入院。初夢悩ましい。引越した家揺れる。太鼓の名人, パチ手作り。剣道の大会(5分42秒)。初詣おみくじ中吉。夢で怒られた。スパイスでカレー作ろう。正月宴会。通学の列車。初めてのボーリング。野球雨でできない。智頭, 山じゃなくて谷。DVDで家族愛。薬は最後まで飲もう。猫の譲渡会。学ランぬれる。サッカーでキーパーひま。好きな匂いガソリン。水泳の目標。髪短くした。凍った道すべる。剣道県大会。ミニチュアダックスフンド。サクスリード替えず雑音。河合音楽コンクール。ゲームボーイアドバンスにお茶。性格人見知り。バスケシュートフォーム直す。ハイブリッド車のバッテリーあがる4万円。ジュニアオーケストラレッスン多忙。家の階段に血痕。書道昇格。テニス逆上アタック。

7周目

テニスコート工事で使えず。節分豆まき, 鉄火巻き。寝る時間8時間。節分行事にうるさいおばあちゃん。初志貫徹剣道みんながやらないときにやる(7分06秒)。おじいちゃん手術終了お見舞い。書道7段合格。ゲームマナー悪い人に学ぶ。エレクトーン金賞とりた。以前首里城前に行ったけど知らずに見た, 後悔。期末テスト今度は課題をためない。お菓子作りシュークリームに挑戦。大豆製品すっごく好き。試合国府に勝って青谷に負けた。兄の高校入試。カインズホーム前マック塩辛。「ヤベっちFC」サッカー情報おもしろい。いとこのセーブデータ消えた。最近コンタクト, つけたら世界変わる。ストレッチなしで水泳したら。対馬丸映画の設定おかしい。安部と温泉に行ったら変な人(フィクション)。父運動好き。自分のダメな生活。髪を切りましたが。隣の家は猫屋敷, イノシシサイズのネズミ。タクシーのつたら変なところへ。太鼓の達人「鉛筆型」と「ペーパー型」。幼稚園のころ問題児, 水槽の金魚つかんで食べた。寝ている間に髪を切られて。日

課ホームベーカリーでパンを焼く。弟バカ、「家出」してケロ。兄免許取り立て車線変更。盗られた自転車まだ見つからず。左手にシャー芯刺さる。野球2年崩壊。ピアノ「メジャー」難しい。マイブーム、自作ドラム。

8周目

父さん教育委員会で短気。知り合いのおじいさんに道を何度も尋ねられる。ポテトがぼてっと落ちる。先週のサッカーの試合。駅の地下の看板の人齋藤先生に似ている。12時に寝ると朝記憶ない。だじゃれに笑うと父機嫌良い。サッカーユニフォーム南君履いていた(フィクション)。小六の先生(9分08秒)。原点プラスとマイナス。おじいちゃんリハビリ順調。土日早く寝る。球技大会と選挙。一歳からキムチ好き。1日1日大切。「顔の炭」いい。湖山でストパーかけました。のど痛く声でないときの通販電話。太鼓の達人小さい子に叩かれる。花粉症小4から。高熱幻覚。9歳下妹卒園。土日試合ばかり、たまのオフ。祖母多趣味、家に窯。いとこ、ブランコ落ちた。お父さん大好き、会えるの楽しみ。本の紹介、友人と一緒に。数日で2年が終わる。亀田製菓、特にハッピーターンの粉好き。いとこ全部で7人。手作りウノでウノタワー。駅前署名「労働者最低賃金」。五人家族、父、家でボケ。職場体験、大丸、新鮮。折り鶴、幼稚園の時、先生の父のため十羽折った。本の紹介「リードアットオンライン」。(株)ゲーム、1000円負けている。ワックスがけボランティア募集。

資料6 平成22年度3年A組 クラスのメンバーは同じテーマのもと、何を選んだか。共時的羅列。

1周目「好きな〇〇」(1回目)

色、色、時間、漫画、犬、風景、曜日、小説家、音、バレーチーム、ゲーム、映画、キャンプ、つつみがみ、季節、スポーツ、動物、すき焼き、メタルギア、コンビニ、とき、時間帯、フルーツ、牛乳、季節、参考書、豆腐、筋肉、バスケット、日本、プールの水、ゲーム、シャーペンの出具合、雨、スポーツ、ひまつぶし道具、アイス、試合の負け方。

2周目「好きな〇〇」(2回目)

スポーツ。ねるときの環境。チュッパチャプスの味。硬式野球ボール。ディズニー。体育館。自動ドア。スライディング。漫画。食肉。瞬間。バスケットシューズメーカー。動物。パズル。インスタントラーメン。市内。チュッパチャプスの舐め方。部屋。学校の机と椅子。すき焼き。小学校の先生。紙。CDのケース。器械体操。こと。天気。エスカレーター。季節。カメラ。勉強する場所。リップクリーム。ポケモン(11分30秒)。メタルギアヘッドショットの仕方。アーティスト。ボーイスカウト指導者。精神状態。テレビ見方。漢字。

3周目「好きな〇〇」(3回目)

おでん。筋トレ筋肉。バスケプレー。TV番組。ポケモン(前回の続き、12分21秒)。夏休み。時計。入浴剤。動物。袋の開け方。席。試合の雰囲気。スポーツ。時間帯。メタルギア。食べ物。飲み物。季節。あんこ。テスト問題。教科。本の読み方。調味料。天気。漫画家。映画。消しゴム。バスケゴール。表彰式。野球選手。チョコ。ダンスのジャンル。お菓子。お菓子。筋トレ。電卓。

4周目「〇〇といえば」(1回目)

春といえば……よっぱらい・桜の花見・花粉。夏といえば……しゃんしゃん祭・日焼け止めクリーム・ポケモン。秋といえば……ハロウィン・秋葉原・カメムシ嫌い。冬といえば……お正月・スポーツ・さむい嫌い。平日といえば……特に何も無い日・汽車・代休になったときの休日。休日といえば……池本くん家に行く・風紋祭・ジャスコ。買い物といえば……袋・通販・コンビニ。乗り物といえば……アトラクション・バス・エレベーター。正月といえば……ストレス発散・大晦日から・1億円お札。お盆といえば……給食で出てくるお盆・交通事故・ごはん。クリスマスといえば……プレゼント・サンタ・プレゼントのカッターナイフ。充実感といえば……カードゲーム・人生・趣味の水泳とピアノ。暇つぶしといえば……プチプチシート・BS11バーチャルトリップ。

5周目「〇〇といえば」(2回目)

ファーストフードといえば……モス・ハンバーガー・マック割引券。集中できる場所・時といえば……自分の部屋での勉強・母の前・先生の前。動物といえば……犬・人間・犬。楽しいときといえば……友達と話す・日本のトレーディングカードゲーム・計画実行。雑学豆知識といえば……日焼け止めの表示・父の値切り法・バスケ背番号。青春といえば……ピアノ・ゲーム・今までがんばってきた剣道。100円ショップといえば……「100円じゃないもの」売ってる・茶道部買出し・チュッパチャプス3個。鳥取といえば……人口少ないのがよい・方言・世間からみた鳥取。イライラ解消法といえば……寝る・親はものを投げる・友達と笑う。植物といえば……やさい・ブロッコリー・おじぎ草(チャレンジのおまけ)。食べ物といえば……焼き肉・おでん・野菜。祭といえば……フラワーフェスティバル・屋台・「後の祭」。スイーツといえば……スイートポテト、パフェ。

6周目「〇〇といえば(ことわざ編)」(1回目)

「石橋を」といえば……Mr. T・お笑い番組。「海老で鯛」といえば……マトリックス・テスト。「雨垂れ石」といえば……数学・筋肉痛。「立つ鳥後」といえば……人は思いを残す・土曜にあったこと。「情けは人」といえば……つみかさね・4年の給食。「塵も積も」といえば……国語とか英語、ポイントカード。「覆水盆に」といえば……小3のパン・第一印象。「井の中の」といえば……附中・トレーディングカードゲーム。「聞くは一」といえば……ダンス・一生のトラウマ。「三つ子の」といえば……爪切る・幼稚園児。「猫に小判」といえば……現代美術・かに鍋。「河童の川」といえば……同様ことわざ・齋藤先生。「仏の顔も」といえば……なぜ3度。父。「鉄は熱い」といえば……英語トレーニング・テレビの人。「傍目八目」といえば……ジャスコで友達失踪・友達に相談。「ケガの功」といえば……ソフトテニスの失敗が・保育実習。「棚からば」といえば……テストのひらめき・(欠席)。「魚の目に」といえば……お金・メガネ。「縁の下の」といえば……土の虫の生態系・病院のサンタ。

7周目「〇〇といえば(ことわざ編)」(2回目)

「好きこそ」といえば……父の料理・野球理科英語の勉強。「犬も歩け」といえば……川の色と同じへび・小4の冬。「青菜に塩」といえば……ナメクジに塩・部活。「船頭多く」といえば……知らない人からのコーチング・部活。「天知る地」といえば……グラウンド整備・政治家汚職。「漁夫の利」といえば……バレーの役・正月のテレビチャンネル権。「ローマは」といえば……国語能力・華道の先生。「伝家の宝」といえば……水戸黄門・テストのカン。「夏は日向」といえば……書道・下校ルート。「あいさつ」といえば……父・テニスの試合。「案ずるよ」といえば……入試・スピーチ。「背水の陣」といえば……逆転の背景・受験。「大海の一」といえば……バスケットのシュート練習・日々の行動。「蝸牛角上」といえば……すきやきにエリンギを入れるか・海苔の葛藤。「三人寄れ」といえば……おでんのうまさ・吉田松陰。「取らぬ狸」といえば……笑い飯・剣道の大会。「釈迦に説」といえば……サルの木登り・国語の授業。「雨降って」といえば……谷口先生・妹反抗期。「策士策に」といえば……(欠席)・テスト直前の。

8周目「〇〇が△△する物語」(1回目)

「一生懸命決してあなたを忘れない」「風が強く吹いている」「KAGEROU」「砂糖菓子の弾丸は撃ち抜けない」「僕たちとちゅうざいさんの800日戦争」「龍が如く」「名探偵コナン」「君に届け」「Brave Song」「風に舞いあがるビニールシート」「雨上がり(晩夏のプレーボール)」「GANTZ」「カイジ」「CALLING～黒き着信～」「とんことり」「ロストプラネットII」(13分00秒)「ソラニン」「あんぱんまん」「ダイヤのA」「となりのトトロ」「もし高校野球のマネージャーが「マネジメント」を読んだら」「武士道 シックステーション」「猫の恩返し」「桃太郎」「ポケモン」「旅行者の食卓」「ホームアローン1」「塩の街」「バクマン」「千と千尋の神隠し」「モンスターズインク」「オリエント急行の殺人」「くるみ割人形」(齋藤注: 表記は、生徒のプレゼン記録用紙によった)

9周目「〇〇が△△する物語」(2回目)

「いきもの図鑑」「キャプテン」「ブラダを着た悪魔」「テニスの王子様」「チャーリーとチョコレート工場」「AKB48(生徒注: 秋元康の作品のひとつ)」「新世紀のラブソング・プロモーションビデオ」「ウインブルドンヒストリー2012」「幸せのレシピ」「ホイッスル!」「天空の城ラピュタ」(5分58秒)「野村野球ノート」「シアター」「ライヴ」「サザエさん」「四畳半神話大系」「告白」「ドラえもん」「西の魔女が死んだ」「エリン・プロコピッチ」「まきゆう」「火車」「高慢と偏見」「シンデレラ」「ドラえもん」「Child 44」「ハリポッターと死の秘宝⑤」「炎のゴブレット」「甲子園の星」「デスノート」「はちみつとクローバー」「スラムダンク」「ぼくはここにいる」「バギ」

資料7「再現」作品 3年6周「ひろき」プレゼンを「ひでゆき」が再現

小6のときの担任の先生。Mr. T. おそろしい。中間休けいでサッカーをしていた。時間によゆうをもって教室へ向かったが、ろうかにだれもおらずしずまりかえっていた。外の時計がおくれている。教室でMr. T. がにおう立ちして、前に並ばされ、一人ずつあやまれといわれた。一人目の人が言ったあと、無難に2番目がいいかと思ったら、ほかの人とかぶってしまい、わらってしまった。そうしたら、Mr. T. が後ろからもえるゴミのつまったゴミぶくろを投げた。同じことがあった。2発目がとんできた。普通に座っている人にあたった。Mr. T. はあせった。そして、「じゃ、授業始めようか」となった。それらしい、外の時計は直ったが、外で遊ぶときは皆、自分のうでどけい信じるようになった。これこそまさに石橋を叩いて渡る、である。

資料8「再現」作品 3年8周目「ひろき」プレゼンを「しよと」が再現

「ひろき」くんの話では、作品名が「ぼくたちと駐在さんの700日戦争」で、高校生の主人公が友達といっしょに駐在さんにイタズラをする物語で、その話は半分フィクション、半分ノンフィクションでつくられている。ひろき君は友達からこの話を読んでほしいと言われ読み、友達といっしょにイタズラをしようと話す。イタズラの内容は、ろうかを走ると先生が飛んでくるので、それをつかかって、走った音をあしぶみでして笑い声を入れることで効果的になるということだそうです。それを実行したところ、ギャラリィもたたくさん来て、尊敬のまなざしで自分たちを見てきた。そのイタズラは大成功して、調子にのって何回もして、アルゴリズム行進をしてうさくしたところ、一人しか行進できずダンスみたいになってしまった。物語を半分ノンフィクションの方を信じておけばよかった。

資料9「再現」作品 3年8周目「ひろき」プレゼンを「ともか」が再現

「僕たちと駐在さんの700日戦争」駐在さんにいろいろ仕かけて仕返しされる話で、この本が流行っていたので、先生に日頃のし返しをしようと思って、実行した。小学校には、ろうかをはしってはいけないという厳しいルールがあったので、職員室の上の階で走らずに足踏みをどンドンアルゴリズム体操をした。先生がきてもふつうにアルゴリズム体操しているだけだといふ成功。しばらくするとギャラリィがふえてきて、先輩から尊敬のまなざしで見られるようになった。何度もやっていると、谷口先生に見つかり、相談室につれていかれた。この本の作者は半分ノンフィクションで、半分フィクションだと書いていたので、半分フィクションのほうを信じた方がよかった。

資料10「再現」作品 3年9周目「あやか」プレゼンを「ひろこA」が再現

作品名は、「薄桜鬼ハクオウキ」で、これはゲーム。内容は、京都で新撰組と出会い、主人公千鶴が絆を深めていく物語。◆変若水(ひろこA注: おちみず?)を飲むと鬼になってしまう、このことを羅殺ママ(ひろこA注: らせつ?)という。変若水はトマトジュースみたい。◆このゲームは、新撰組のキャラを1人選び、こくりやくしてゲーム。とくに沖田さんが好き。内容がともこつていて、しじつにあるようにけっかくにかかり2人でりょうようする。◆命がけて戦うところは、電王の映画(ひろこA注: ?)の最後なみに泣ける。

資料11 3年後期中間テスト表現問題「過去と未来をつなぐ 中学生活と十年後の自分」, 「しき」の文章

僕は附属中学3年間の国語の授業で色々な経験をした。中でも「プレゼン」の授業ではたった20分ほどの少ない時間の中に多くを学んだと思う。初めのほうでは「話すことがない」とか言いながら工夫も何も考えずにダラダラと部活の話をしてた。でも友達はみんな表現や自分の意見など多彩な工夫をしており、話自体も凄くおもしろかった。だから最後のほうでは僕も、自分の知らなかったことやいろんな話をテーマに沿って話したりした。

この経験にさらに磨きをかければ将来の会社のプレゼンテーションなどでも役立つと思うし、知らない人とのコミュニケーションにも役立つと思うので残りの国語の時間、大事にすごしていきたい。

資料12 3年後期中間テスト表現問題「過去と未来をつなぐ 中学生活と十年後の自分」, 「ゆうき」の文章

僕はこの附属中学校での3年間でたくさん経験をつむことができました。たとえば、将来に直接つながっていき勉強や、友人たちとの交流とかが大きなところだと思います。ほかにもあまり人前で話したりすることが苦手のできるだけ避けようとしていた自分にとって国語科でやったプレゼンといった取り組みはその苦手をこくふくするためのとてもいいチャンスになりました。この人見知りといった苦手意識はなくたくさんの人とかかわっていかなくてはいけない社会に出てからにとっても大きなマイナスになっていくんだらうなあと自分でも少し不安になってた部分はあったので、今からでも少しずつならしていくことはとても大切かつ将来につながっていくことだと思います。まだ十年も先のことは分からないけど自分の個性を生かせるような職業につきたいと思います。

資料13 3年後期中間テスト表現問題「過去と未来をつなぐ 中学生活と十年後の自分」, 「あやか」の文章

私がこの中学3年間で学んだ大きな事。それはコミュニケーションだろう。私にとって、国語の授業はとても新鮮だった。今までやってきた国語はなんだったのだろう!! そうとしか言い様がない。なかでもプレゼン。人前に出て話すという行為に、少なからず抵抗があった。でもここでは違った。話すこと全てを受け止めてくれる仲間がいる。空間がある。話すことってこんなに楽しんだ!! 私は今、話すことが好きだ。そんな私は何をしているだろう? 話すことが好き。話す職業。通訳。声優。歌手。ラジオのパーソナリティー。様々だ。夢とかそういうことを聞かれても、少し困ってしまう。でもこれだけは言える。「みんなに私の声をとどけたいな。」

資料14 「卒業文集」, 「あやか」の文章

(略) この3年間で私は、モヤモヤしていた「好きなこと」が一気にはっきりしてきた。話すこと・書くこと。言うなれば、伝えること。大好きだ。本当に。自分の気持ち、自分の世界。皆に伝えて、共有したい。それを話して、書いて伝えることができたらどんなに幸せか、と思う。そして私は、「大好き」という気持ちを3年間で磨いてきた。国語の授業とテストだ。授業とするプレゼンは、聞くのも楽しい。他の人のテクニックを耳で鍛える。たくさん発見がある。そして、それを生かしながら自分の発表。とても小さなステージ。でも、自分に与えられた時間だけは輝いていられる。過剰意識かもしれない。でも、とても充実している。それが嬉しい。楽しい。テストの作文だって同じだ。見てくれる人は少ない。けれど、自分の世界を見てくれる人がいる。時間がギリギリのときもある。でも、文章に妥協はしない。今の自分の全てをぶつけて書く。魂を込める。そうすれば、将来の糧になる。そう信じている。中学3年間は決して無駄じゃない。そう思える日が来る。私は信じている。(略)

資料15 「卒業文集」, 「こうだい」の文章

ぼくは今まで何か持ってると言われてきました。それは仲間です。(略)
さいう先生。あなたなしではこの3年間はかたれないだろう。あなたは二、三年の担任だ。ぼくが今まで出会ったどの大人ともちがった。あたまごなしにおこらない。けしてぼくを否定しない。そのおかげでぼくはもう一人の自分を見つけてしまった。一年生のころのあなたは何を言っているのかさっぱりわからなかった。でも、今ならわかる気がする。十年後……のみつれてってな。

齋藤 隆彦 (鳥取大学附属中学校)

文献

浜本純逸(2008) 『国語科教育の未来へー国語科・日本語科・言語科ー』 溪水社pp94-95

佐藤学(2000) 『教育改革をデザインする』 岩波書店 pp107-108

石原千秋(2002) 『小説入門のための高校入試国語』 日本放送出版協会pp40-41